

地理紀要

第 33 号



消えたランドマーク 日産座間工場 (1995 年撮影)

2016

神奈川県高等学校教科研究会社会科地理分科会

地理紀要

第 33 号

2016

神奈川県高等学校教科研究会社会科地理分科会

目 次

世界を見る

北イタリアの「自治都市」を巡る	福元雄二郎（神奈川大学附属中・高等学校）・・・	2
-----------------	-------------------------	---

第12回 国際地理オリンピック(iGeo)大会報告	井上明日香	（県立元石川高等学校）・・・	12
---------------------------	-------	----------------	----

私の教材紹介

新科目「地理総合」とアクティブ・ラーニング	根元 一幸	（県立座間高等学校）・・・	16
-----------------------	-------	---------------	----

横須賀中心部の巡検	野本 聡	（県立津久井浜高等学校）・・・	21
-----------	------	-----------------	----

山川菊栄が見た藤沢 ー大船から藤沢を歩くー	吉村 憲二	（県立寒川高等学校）・・・	25
-----------------------	-------	---------------	----

委員会報告

横浜市磯子区臨海部の巡検	井上 達也	（県立鶴嶺高等学校）・・・	28
--------------	-------	---------------	----

地理学力テストと2015年度の問題について	伊藤 直樹	（栄光学園高等学校）・・・	32
-----------------------	-------	---------------	----

港北ニュータウンミニ巡検	小川 剛史（サレジオ学院中学校・高等学校）	・	35
--------------	-----------------------	---	----

在日外国人社会の変遷と現状			
ー在日チャイニーズを中心にー	野村 進	（ノンフィクションライター・ 拓殖大学国際学部教授）	・ 38

表 紙

日産の座間工場は、同社の主力組立工場として、サニーをはじめとする車種が製造されたが、バブル崩壊後の1995年に、リストラの一環として自動車生産工場としては閉鎖された。現在は、日産の座間事業所に改名し、自動車生産の為の型・治工具・設備・電子機器の生産設計開発及び製造や、電気自動車のリチウムイオンバッテリーの開発・生産などを行っている。

北イタリアの「自治都市」を巡る

福元 雄二郎（神奈川大学附属中・高等学校）

はじめに

高等学校で地理の授業を扱う際に、北イタリアは不可欠な地域である。現行の学習指導要領地理Bの大項目(2)現代世界の系統地理的考察の中項目(イ)で、農業や工業分野の事例地域として北イタリアはまずはずせない。また、中項目(ウ)の中で、都市の歴史的発展過程の説明として、北イタリアの「自治都市」を授業で挙げる先生方も多いのではないだろうか。一昨年、昨年と2年連続して夏季休暇を利用して北イタリアを巡る旅行を企画した。その時に得られた見聞も踏まえて、北イタリアに関するいくつかの所見を本稿で紹介させて頂く。先生方の授業に少しでも役立てていただければ、幸いである。

1. 北イタリアの概要

北イタリアといっても、どこまでを北イタリアと呼ぶのだろうか。歴史的に扱う場合、トスカーナ州のフィレンツェなども含めて北イタリアとする場合もあるようであるが、現在のイタリアの行政区分においては、ヴァレ・ダオスタ、ピエモンテ、レグーリア、ロンバルディア、トレンティーノ＝アルト・アディジェ、ヴェネト、

エミリーオ・ロマーニャ、フリウリ・ヴェネツィア・ジュリアの計8州からなる地域を指す(図1参照)。さらにこの8州は、統計区分的にヴァレダオスタ、ピエモンテ、レグーリア、ロンバルディアの4州からなる北西部と、それ以外の4州からなる北東部に区分される。また、8州の中で3州は、「特別自治州(もしくは自治州)」に指定されている。「特別自治州」とは、イタリア憲法で規定された行政単位であり、一定の分野において独占的な立法権を有するほか、付加価値税を除く国税の一定配分を受けることが出来る州となっている。ちなみに、ヴァレ・ダオスタ特別自治州では、イタリア語の他にフランス語、トレンティーノ＝アルト・アディジェ特別自治州では、イタリア語とドイツ語、そしてスイスで使用されているロマンシュ語と同じレト・ロマン語群に属するラディン語の併用が認められている。フリウリ・ヴェネツィア・ジュリア特別自治州ではイタリア語の他に、ラディン語同様にレト・ロマン語群に属するフリウリ語、そしてスラブ語系のスロヴェニア語が併用されている。イタリアも多言語国家なのである。

北イタリアの自然環境分野で特記すべきこと

と言えば、やはりパダノ＝ヴェネタ平野の存在であろう。構造平野などの侵食地形を流れる河川が多いヨーロッパの中で、アルプス山脈などを水源とし、流域に46,000km²にも及ぶ堆積平野を形成しているポー川はやはり特異な存在である。パダノとは、ラテン語でポー川を意味するPadusを語源とする名称であり、ポー川流域の地域を意味している。ヴェネタとは現在のヴェネト州周辺地域を意味し、本来、この地域はポー川でなく、ポー川と並行して流れ



図1 北イタリア概略図

るイタリア第二の河川、アディジェ川流域の平野に属するが、この両者を連続した自然環境とみなし、パダノ＝ヴェネタ平野と称している訳である。ちなみに、ロンバルディア平原という名称は、厳密に言えばロンバルディア州周辺のポー川中流域の左岸にあたる地域を指している。北イタリアは水系的に、地中海に面したレグーリア州以外はほぼ全ての州の河川がアドリア海に注いでいる。これらの中で、アルプス山脈を水源とするいくつかの河川には流域に氷河湖が点在する。特にガルダ、マッジョーレ、コモの3湖は規模が大きく、湖岸周辺には北イタリアでも屈指の保養地が形成されている。

次に人口に目を向けてみよう。イタリアの人口動態に関して言えば、死亡率が出生率を上回っていることは、地理の授業を担当されている先生方なら周知の点であろう。イタリアの人口の自然増減率は、日本に先行して1990年代からマイナスに転じている。しかし、イタリアの常住人口は現在でも増加傾向にあり、人口減少が始まるのは2020年代以降と推定されている。イタリアの人口減少に歯止めをかけているのが、海外からの移民や労働者の移入による人口の社会増加現象である。1990年頃には、国内に50万人にも満たなかった外国籍の人口は、2000年代以降になって急増を初め、2009年末には約420万

人台まで急増した(図2)。このような外国籍の人口急増の背景には2つの要因が考えられる。

1つ目がドイツの移民政策の転換である。1970年代の中頃に人口の自然増加がマイナスに転じたドイツでは、比較的に寛容な外国人の移入政策を行ってきた。しかし1990年代になると、東西冷戦の終結に伴う東欧諸国からのドイツ系移民の急増や、2001年に起きた同時多発テロの影響もあり、移民の入国制限や入国後のドイツ社会への統合(同化)政策の実施を軸にした移民法が2005年に制定され、外国人の移入が従来よりも厳しく制限されるようになった。この結果、EU内に流入する外国人の流れに変化が生じ、ドイツに代わってイタリアへの流入数が増大したのである。もう1つの要因が2004年から始まる東欧諸国のEUへの加盟である。特に東欧諸国内でも所得の低い南部諸国に近接しているイタリアの地理的な位置は重要である。2011年に実施されたイタリアの国勢調査によれば、同年の12月末現在、イタリア在住の外国人の国籍で最も多いのがルーマニア(約82万人)、第2位がアルバニア(約45万人)となっており、この東欧2カ国だけで、全体の約32%を占めている。州別で比較すると、第1位はミラノを抱えるロンバルディア州で、約98万人が居住しており、実に州人口の10人に1人が外国籍となっている。第2位

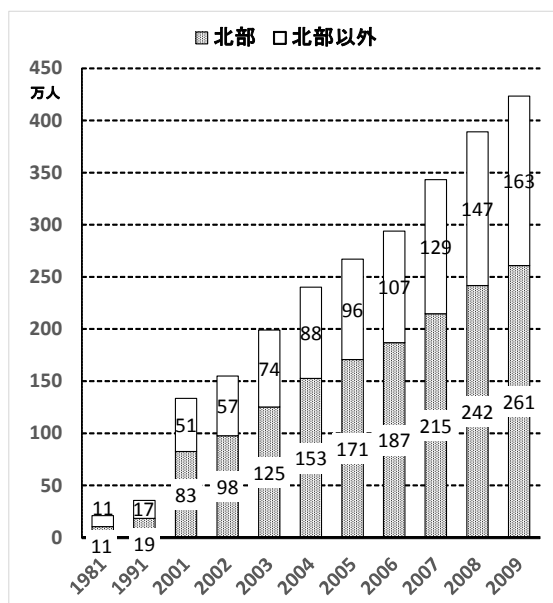


図2 イタリア在住の外国人登録者数の推移

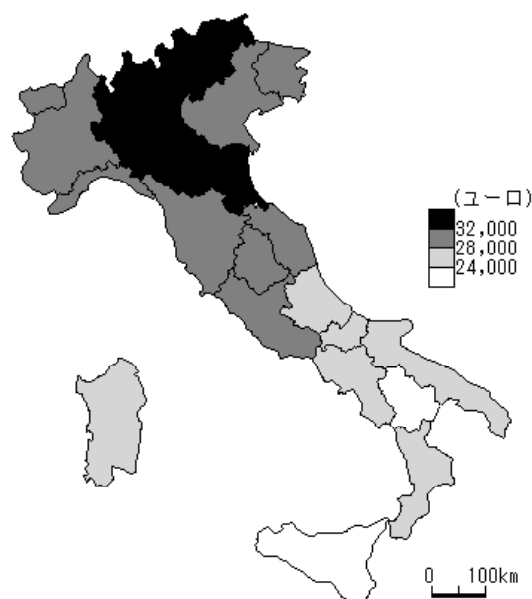


図3 イタリアの州別平均所得(一世帯あたり・2012)

いずれもISTAT(イタリア統計局)資料より作成

は首都のローマが位置するラツィオ州(約50万人)であるが、第3位以下は、ヴェネト、エミリーオ・ロマーニャ、ピエモンテと北部の各州が続く、外国籍人口全体の約62%にあたる約261万人が北部に居住している。このようなイタリア北部への外国人の集住傾向は、勿論、イタリア国内の地域的な経済格差が関係している。図3は、一世帯あたりの平均所得(2012年)を州別に比較したものである。州別で平均所得が最も高いのは、トレンティーノ＝アルト・アディジェ特別自治州(特に通称南チロルと呼ばれるドイツ語系住民の割合が高い北部のボルツァーノ自治県の平均所得は36,000€に達する)とロンバルディア州で、共に34,000€を超えている。これに対して所得が低いのがシチリア州の20,897€、次でバジリカータ州の23,108€と南部の州が続く、前者との間には実に10,000€以上の格差が生じている。このような南北の経済格差を是正するために、イタリア政府は長期にわたって財政的な投資・援助を南部に行ってきた。特に1950年代から1960年代にかけて行われた「バノーニ計画」は、地理の授業を担当されている先生方にはなじみの深い用語であろう。しかしこのような政策は南部の極一部の社会集団や北部の大企業を潤すだけで、南部の貧困層にまで波及効果をもたらしているとは考えがたい。2011年の統計によれば、同年末の失業者率はイタリア北部が5%台にとどまっているのに対し、南部では13%台にまで達している。特に15歳から24歳までの若年層では失業者率は実に40%以上にまで達し、深刻な社会問題となっている。

このような状況の中で、北部の労働者層を中心として、イタリア政府の政策や既存の政党に対する不満は増大し、1991年にウンベルト・ボッシを党首とする「北部同盟」が結成された。

「北部同盟」は中央集権国家から連邦制国家への移行と外国移民の排斥を政策の柱として掲げ、1992年に行われた総選挙では、下院(代議院)で56議席、上院(元老院)で17議席の議席を獲得した。その後同党は、イタリア政権再編の中心となり、1994年の総選挙では、ベルルスコーニが率いる「フォルツァ・イタリア」などとともに中道右派連合の一躍を担う選挙戦を行い、結果的に誕生した第一次ベルルスコーニ内閣では、複数の大臣職を排出する与党第2党の地位にま

で躍進を遂げた。その後、「北部同盟」は政府の地方分権政策が進まないことを理由に連立与党から下野し、1996年には一方的に「パダーニア連邦政府」の樹立を宣言する奇策に打って出る。これが俗に言われる「パダーニア事件」である。この事件以降、「北部同盟」は党内が「パダーニア事件」を主導した急進派と穏健派などに分裂を初め、その後、党首でカリスマ的な存在であったウンベルト・ボッシによる党資金の横領問題が発覚するなど、党としての求心力を失っていく。2013年に実施された最新の総選挙では、「北部同盟」は両院合わせて35議席を獲得するのにとどまり、政治的発言力は後退した。しかし、2009年に起きたギリシアの財政破綻問題を端に発した緊縮財政政策や外国人の増加に対する国民の不満は解消されたわけではなく、「北部同盟」に見られた社会現象が一過性で終わるとは考えにくい。2013年の総選挙で中道左派の率いる民主党に次ぐ与党第2党に躍進した「五つの星運動」も「北部同盟」同様に移民や難民の移入に関して否定的な立場をとっている党であり、昨年(2015年)から注目されている中東難民のEUへの流入問題に対して、イタリア政府が今後どのような立場をとっていくのかが注目される。ちなみに、イタリアへの難民流入問題はトルコ・ギリシア経由の難民ルートに先行して、2013年頃から、「アラブの春」に端を発してリビアやチュニジアなどからの北アフリカ難民がシチリア島の南に位置するランペドゥーザ島へ流入を始めたことによって既に始まっている。昨年の夏、イタリア滞在中、テレビの報道番組では連日のようにシチリア島に上陸する難民の映像を流していたのが印象的であった。

2. イタリア北部の諸都市

次にイタリア北部の歴史について概略してみよう。イタリア北部はガリア人の住む地域として、いち早く共和制ローマの属州(ガリア)となった地域で、ガリア・キサルピナと呼ばれた。その範囲はアルプス山脈の南側から、アペニン山脈の北麓とルビコン川を結ぶ線の間の地域で、現在のパダノ＝ヴェネタ平野にレグーリア州を含めた範囲に相当する。属州時代、この地域には主要街道として、エミリア街道が紀元前187年に敷設され、街道沿いに現在のボローニャ、モ

デナ、パルマといった都市が軍事的拠点として建設された。地図で見るとこれらの都市は、南東から北西方向へ直線上に配列されている。この線は「衝突型」の「せばまる境界」にあたるアペニン山脈北側の断層線と一致しており、いわゆる「谷口集落」的な立地条件の所に、等間隔に都市を建設していったことが推測される。ローマの帝政移行後、ガリア・キサルピナはいち早く属州から本土へ組み込まれ、この地域のローマ化が進行した。西ローマ帝国の崩壊(紀元476年)後、6世紀になるとこの地域には、アルプス山脈を越えてゲルマン系のロンゴバルト(ロンバルト)族が侵入し、ロンゴバルト王国が建国される(現在のロンバルディアの語源となっている)。ロンゴバルト王国は、東ローマ帝国の支配下にあったアドリア海の沿岸と、ローマ教皇領などの一部を除き、ほぼイタリア全土まで支配地域を拡大したが、ローマ教皇の依頼を受けたカール大帝により制圧され、774年に滅亡した。カール大帝は、ローマ教皇より西ローマ帝国の正当な後継者としてローマ皇帝の号を戴冠される。この歴史的な出来事が、その後の北イタリアの歴史を運命づけたと言っても良い。何故ならば、フランク王国分裂後、北イタリアは、神聖ローマ帝国やフランス王国などによって度々、その支配の「正当性」を根拠に侵略を受けることにより、約1000年の長きに渡って単一の政治組織にまとまることなく、この地域独自の複雑な歴史的「重層性」が形成されたからである。

10世紀以降になると、北イタリアの諸都市は交易を通して商業都市として発展を遂げるようになったが、12世紀になるとその富を狙って度々、神聖ローマ帝国が侵略を試みるようになる。これに対して、北イタリアの諸都市はローマ教皇の宗教的な権力も巧みに利用しながら、「ロンバルディア同盟」と呼ばれる軍事同盟を結び、神聖ローマ皇帝の権威を認める代わりに自治権を獲得していったのである。しかし、15世紀末になると今度はフランスが介入するようになる。イタリア戦争と呼ばれるこの出来事は断続的に16世紀中頃まで繰り返され、当時、ルネッサンスの最盛期にあった北イタリアの諸都市は内部分裂し、抗争を繰り返すことで弱体化していったのである。その後、この地域はハプスブルグ家やナポレオンの支配を経て、19世紀中頃、よ

うやくサルディーニャ王国によって地域的な統一が達成された(サルディーニャ王国に関しては地理紀要27号に掲載させていただいた『サヴォイア地方を巡る』を参考にして頂きたい)。

(1) ミラノ

ロンバルディア州の州都であるミラノは言うまでもなく、現在、首都ローマに次ぐイタリア第2の都市に発展している。イタリアの諸都市の歴史的な人口推計には諸説あり、正確な人口数は確定できないが、ルネッサンスの最盛期にあたる1500年のミラノの人口は、およそ10万人であったと考えられ、ミラノの最大のライバルであったヴェネチアの人口数とほぼ等しいが、当時、イタリア国内で最大の人口を有していたナポリ王国の首都ナポリ(15万人)には及ばない。イタリア王国への統一が達成された1861年に、第1回目のイタリア国勢調査(センサス)が行われているが、この時点でも国内第1位の都市はナポリ(約48万人)であり、ミラノの人口はその半分の約28万人に過ぎない。ミラノの人口が急増を始めるのは急速な工業化が進んだ20世紀になってからのことである。その後ミラノの人口は1970年代に170万人代までに達し、頂点を迎えるが、1980年代になると、高齢化や郊外への人口転出などにより減少に転じ、2013年の時点で約132万人となっている。

ミラノのシンボルとなっているのが、旧市街地のほぼ中央に位置しているドゥオーモ(Duomo)=大聖堂である。この壮大な建造物は、1386年にミラノ公国の領主となるヴィスコンティ家の依頼によって建設が始められ、完成したのは実に500年後の1887年のことである。ミラノは1943年に連合軍の空襲を受けているが、ドゥオーモは空爆の対象から外されたこともあり、大きな被害を受けることもなかった。カトリックの教会としては、ヴァチカンのサンピエトロ大寺院に次ぐ規模を誇るこの建造物はミラノ観光の中心にあり、レオナルド・ダ・ヴィンチ作の「最後の晩餐」があるサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会やヴィスコンティ家の居城であり城塞としても利用されたスフォルツァ城、世界のオペラの殿堂として名高いスカラ座など、ミラノ市内の歴史的な見所はほぼ全てがここから徒歩で見学可能な範囲に収まっている。ドゥオーモ前広場とスカラ座前広場はヴィットーリ

オ・エマヌエーレ2世のガッレリアと呼ばれるアーケードで結ばれている。19世紀の中頃に作られたこのアーケードは鉄とガラスで出来た構造物で、当時のヨーロッパで流行した最新のデザインを取り入れたものである。高級ブティックやレストランなどが建ち並ぶアーケードは常に観光客で溢れているが、特に中国からの団体観光客の姿が多く見られた。ちなみにダヴィンチの「最後の晚餐」は、絵画の劣化を防ぐために入場制限をしており、基本的に「当日券」は販売されていない。「最後の晚餐」を見るためには事前にインターネットで予約が必要となるが、「最後の晚餐」に限らず、フィレンツェのウフィッツィ美術館のようなイタリア観光の「お目当て」となっている見学地は、どこも「当日券」を求める観光客で長蛇の列となるので、事前にインターネットでチケットを購入していった方が時間の無駄がなく無難である。

ミラノの旧市街地には、二重の環状道路があり、この都市の歴史的な発展過程をある程度、読み取ることが出来る。内側の環状道路は、12世紀の「ロンバルディア同盟」当時にあった城壁にあたる部分で、市街地はほぼ半径1kmの円内に収まる(図4-1)。外側の環状道路は、それ以降の市街地拡大により、ルネサンスの最盛期となる16世紀に「ミラノ公国」によって作られた城壁部分にあたり、スフォルツァ城がその一翼を担っている(図4-2)。この図を詳しく見てみると、旧城壁の多くの部分が取り壊され

ているが、城壁を囲んでいた堀はそのまま残されており、運河として利用されていたことが判る。運河を兼ねた堀は新たな城壁を囲むようにも建設され、かつてのミラノは、まさに「運河の町」であった。その後1840年代になって、残存していた城壁の外側に複数の鉄道のターミナルが建設され、その周辺の市街地化が進むと、城壁は取り壊され、運河の多くも埋め立て(もしくは暗渠化)されていった。旧市街地の南側にあるテイチネーゼ門の近くに残るナヴィリオ運河が唯一、かつてのミラノの面影を残す場所となっているが、現在この地区は多くのレストランが建ち並び、観光客だけではなく、ミラノの人々にとっても憩いの場となっている。

(2) パルマ

パルマはミラノからボローニャに伸びるエミリア街道のほぼ中間地点に位置し、ボローニャ、モデナに次ぐエミリオ・ロマーニャ州第3の都市となっている。パルマもミラノ同様に12世紀に「ロンバルディア同盟」に加盟し、神聖ローマ帝国から自治権を獲得していった都市である。その後、ミラノ公国の支配を経て、16世紀には、ローマ教皇を輩出したファルネーゼ家の策略により「パルマ公国」として独立し、パルマから西のピアチェンツァまでのポー川右岸一帯を領土としてイタリア王国の統一がなされる1860年まで公国として存続した。パルマは、ポー川の支流となるパルマ川に位置し、川の両岸にまたがる城壁で囲まれた都市で、フランスのパリ同

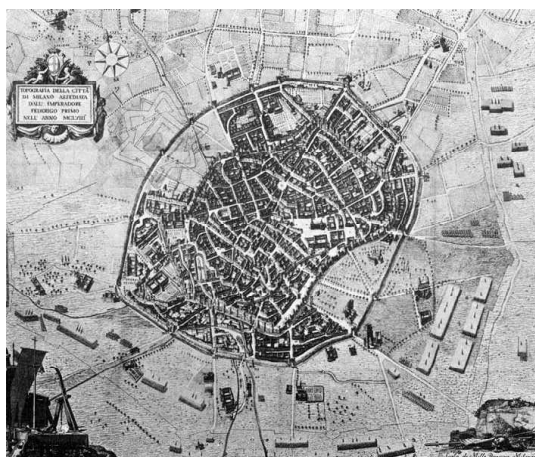


図4-1 1158年のミラノ



図4-2 1573年のミラノ

いずれも Wikimedia Commons より引用

様に河川の通行税徴収が重要な財源となっていたと考えられる。パルマ公国の領主となったファルネーゼ家もルネッサンス時代、芸術の興隆に力を入れたが、特にファルネーゼ家の居城となったピロッタ宮殿内にあるファルネーゼ劇場は必見の価値がある。現存する劇場は、第二次世界大戦の空襲により1962年に再建されたものであるが、バロック建築の石造りの建物の中に木組みで作られたその構造は見事であり、その後、北イタリアの諸都市に建設されていった劇場のモデルとなった。パルマはイタリアオペラの有名な作曲家、ジュゼッペ・ヴェルディの生誕の地に近いこともあり、現在は、パルマ王立歌劇場で毎年10月になると世界的に有名なオペラの祭典、「ヴェルディ・フェスティヴァル」が開かれ、世界から多くの観光客を集めている。

パルマの名前を世界的に知らしめているもう一つのものが、プロシュット・ディ・パルマ(生ハム)やパルミジャーノ・レッジャーノ(チーズ)などの農産物の存在である。両者ともイタリア政府が認定したDOP(原産地名称保護制度)の対象となっている産物であり、イタリアを代表する食材となっている。地理の授業で北イタリアを扱う場合、この地域の農業を「混合農業」、「地中海式農業」のどちらとして扱うべきか悩まれたことのある先生方も多いのではないだろうか。図5はロンバルディア、エミリーオ・ロマーニャ、ヴェネト各州の農業的な土地利用の割合を

比較したものである(2011年)。図から読み取れるように、ロンバルディア、エミリーオ・ロマーニャの両州は牧場・牧草地率が高く、畜産や酪農への依存度が高いことが判る。これに対して、ヴェネト州はアルプス山脈の南麓斜面を利用して、オリーブやブドウなど樹木作物の栽培が盛んに行われており、より「地中海式農業」的な景観を呈している。

(3) ボローニャ

エミリーオ・ロマーニャ州の州都であるボローニャは現在、人口約37万人でイタリア国内第7位の都市である。地方都市ではあるが、ボローニャ空港からはロンドン、マドリード、デュッセルドルフなどと結ぶ国際線が運航されている。ボローニャという都市名は、ローマ時代に建設された植民都市ボノニア(Bononia)に由来する。ローマ時代、ボローニャはエミリア街道沿いの軍事的な要所として発展し、一時期はローマに次ぐ第2の都市にまで発展した。中世になると、ボローニャもミラノやパルマ同様に「ロンバルディア同盟」に加盟し、神聖ローマ帝国と対峙した。しかしボローニャの場合、その後、都市内部での教皇派(ゲルフ)と皇帝派(ゲベリン)の抗争が激化し、ミラノのヴィスコンティ家やパルマのファルネーゼ家のような特定の有力者(シニョーリア制)から世襲的な君主制(公国)へと移行することがなかった点が歴史的に異なっている。ボローニャの旧市街地を歩くと、12

世紀に建設された通称、ボローニャの斜塔と呼ばれる2つの塔が目にとまる。アッシネーリの塔と呼ばれる高い方の塔の高さは97mに達し、低層の町並みが続くボローニャの市内で威容を誇っている(写真1)。教皇派と皇帝派の対立が激化した時代に作られたこのような塔の目的は定かではなく、諸説があるが、最盛期には180ものこのような高塔がボローニャ市内に林立していたといわれている。政治的には決して安定することのなかったボローニャであるが、北イタリアにおけるルネッサンスの開花には大きな役割を果たした。1088年、この地にヨーロッパ最古といわれる

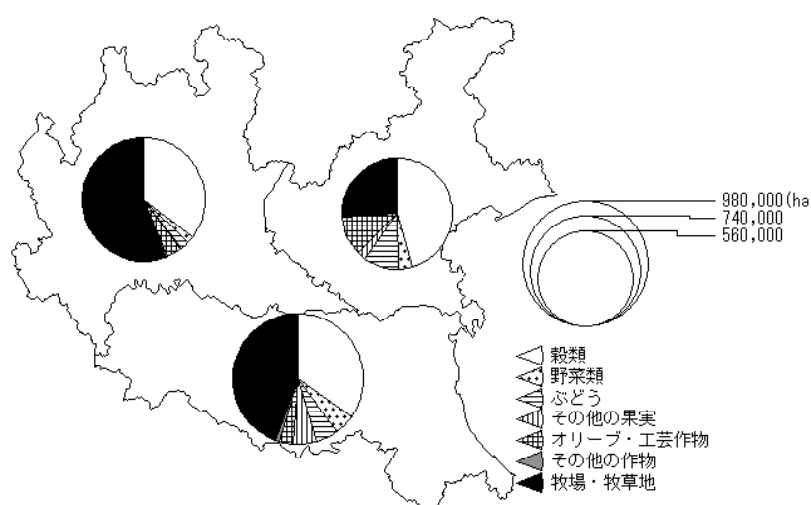


図5 北イタリア3州の農業的土地利用の比較(2011)

ISTAT統計資料より作成

ボローニャ大学が創立されたのである。この大学に在籍したことのある人物には、ペトラルカ、ダンテ、ガリレオ、コペルニクスといった蒼々たる面々が揃っている。現在、アルキジンナージオ宮と呼ばれている建物は、19世紀初頭までボローニャ大学の医学部として利用されていたもので、館内にはヨーロッパで最初の人体解剖の授業が行われたとされる解剖学大階段教室が残されており、一般に公開されている。今日、ボローニャ大学はボローニャだけではなく、ヴェローナなどの周辺都市に学部が分散しているが、学生数10万に及ぶ総合大学であり、多くの海外留学生も在籍している。ボローニャは「学術都市」としての顔も持つ都市なのである。



写真1 アッシネーリの塔

(4) ラヴェンナ

ローマ時代に建設されたエミリア街道を東に向かうと、その終着地点はアドリア海に面した都市、リミニである。リミニはアペニン山脈を越えてローマまで達するフラミア街道の終点にもあたり、両街道の中継地点、ローマ海軍の拠点として発展した。しかし、395年にローマ帝国が東西に分裂すると、西ローマ帝国の初代皇帝ホノリウス帝はリミニの北方60kmに位置するラヴェンナに遷都する。地図を見ると、ポー川河口周辺のアドリア海沿岸の海岸線は、砂州や潟湖などの地形が分布する低湿地帯になっていることが判る。ラヴェンナもこのような低湿地の一部を埋めて作られた都市である。東西分裂により弱体化した西ローマ帝国にとって、街道

沿いの要所よりも、自然の障害で囲まれたラヴェンナの方が防衛上、安全と判断されたのであろう。ラヴェンナはその後、東ゴート王国の首都、東ローマ帝国のイタリア本土の拠点などを経て、ローマ教皇領へと編入された。ルネサンス期、アドリア海の制海権や貿易上の利権をほぼ独占したのは、後述のヴェネチアである。ラヴェンナは徐々に歴史の表舞台から姿を消していった。しかしこのことが、現在のラヴェンナの大きな魅力となっている。北イタリアを巡っていて感じるのは、ルネサンス期、建築様式でいえばゴシック期以降の歴史的建造物は星の数ほどあるのに対して、それ以前の建造物（ロマネスク様式以前）となるとなかなか見当たらない。ラヴェンナにはこの時代の建造物がユネスコの文化遺産、「ラヴェンナの初期キリスト教建築物群」として登録されており、重要な観光資源となっている。特にその中でも、ガッラ・ブラキディア廟堂と呼ばれる建造物は必見の価値がある。5世紀に建造されたこの小さな建物は、外壁が煉瓦で作られた簡素な作りで、採光のための窓も小さいために中は薄暗く、閉塞感に満ちた空間となっている。しかし、暗さに目が慣れてくると、壁面上部とアーチ状になった天井部分に描かれた、光沢を帯びたモザイク画が浮かび上がってくる。特に建物中央部のドーム天井には金色に輝くタイルによって無数の星が描かれており、その幻想的な光景に見学者は心を奪われる(写真2)。このようなモザイク画は明らかに東ローマ(ビザンツ)文化の影響を受けたものであり、最盛期の東ローマ帝国の影響力の大きさを伺い知ることが出来る。



写真2 ガッラ・ブラキディア廟堂のドーム天井を飾るモザイク画

（５） ヴェネチア

周知の通り、ヴェネチアは北イタリアの「自治都市」「ルネッサンスの栄華を誇る都市」の代表的な存在である。しかし、ヴェネチアの歴史はこれまで紹介してきた諸都市と比べると比較的に新しい。５世紀になってゲルマン人達がアルプス山脈を越えて北イタリアに侵入を始めた時、一部のローマ人達が452年に、潟湖状になっているヴェネチア湾に浮かぶトルッチェロ島に避難してきたのが、その始まりとされている。ラヴェンナ同様に、湿地帯で囲まれたこの場所が絶好の隠れ家となったのである。その後、フランク王国が侵入してくると、人々は現在のヴェネチア本島への再移住を余儀なくされた。しかしその後９世紀になると、ヴェネチアの人々はその地理的な条件を利用して、いち早く東ローマ帝国とフランク王国の両勢力に事実的な独立を認めさせることに成功している(803年)。ミラノなどと比較すると実に300年近く早く自治権を獲得したことになる。もう一点、ヴェネチアが他の北イタリアの「自治都市」と異なっていたのは、有力者が統治する「シニョーリア制」や君主による「公国」になることもなく、「民主的」な手段によって選ばれたドーージェと呼ばれる元首を中心とした「共和制」を維持したことである。ヴェネチアは1797年にナポレオンによって征服されるまで、実に1000年近くに渡り「共和制」が継続した世界最長の共和国なのである。ヴェネチアはその後、弱体化した東ローマ帝国に代わってアドリア海の制海権を手に入れ、国力を拡大していった。ヴェネチア最盛期は、15～16世紀にかけての時代であり、ヴェネチアは地中海で最強の海軍を有する国となり、その支配権はアドリア海を越えてエーゲ海にまで及び、キプロス島も一時期、その支配下に置いた。しかし、弁証法的に解釈すれば、このような発展が逆にヴェネチアの衰退を招く結果となったといえる。増大した人口を支える穀物や、造船業で必要となる木材が不足するようになり、ヴェネチアはこれらの産物を北欧から輸入するようになる。しかしこの交易に用いられた商船は、ヴェネチアの船ではなくオランダやスウェーデンなどの北欧船であった。またこの頃から、ヴェネチアは新たな宿敵、オスマン帝国と制海権を巡る争いに明け暮れるようになり、徐々に

ヴェネチアは国力を失っていったのである。

現在、ヴェネチアはローマ、ミラノなどに次いでイタリア国内でも外国人観光客数が多い都市の上位に挙げられる。ヴェネチア市観光局の統計によれば、2014年に同市を訪れた外国人観光客数は369万人に及ぶが、この数値は京都市を訪れた外国人観光客数(2013年の推定値)の258万人を100万人近く上回っている。しかし、ヴェネチアの観光業には問題がないわけではない。同統計によれば、観光客１人当たりの平均宿泊数はヴェネチアが2.3日(イタリア人観光客も含む)なのに対し、京都は3.8日(京都市外国人観光客実態調査による)と、京都の方が長期滞在型の観光となっている。その最大の理由は、ヴェネチア本島の旧市街地は再開発が出来ないためにホテルの客室数が不足し、必然的に宿泊料金が高くなっているためである。また、島内の交通機関は基本的にヴァポレットと呼ばれる水上バスしかないために、観光客は船着き場からホテルまで迷路のような道を荷物を持って徒歩で移動するしかなく、移動に苦勞する。また、中世の建物を改装したホテルも当然のように客室は狭く、快適性を求める観光客にとっては、決して満足度は高くなっていない。本土側には、団体観光客をターゲットにした大規模なホテルがいくつか存在するが、そこからヴェネチア本島までバスで渡り、ヴァポレットで観光の中心となっているサンマルコ広場まで移動しようとする、最低でも１時間は必要となる。観光の利便性、快適さといった意味では、京都の方がはるかに満足度が高い観光地といえるであろう。勿論、このような点を減じてもヴェネチアは魅力の溢れた都市である。サンマルコ広場やドゥッカレ宮殿といった観光スポットに行かなくても、迷路状の道や運河から成る中世の町並みを散策するだけで旅行者は異次元空間に迷い込んだような錯覚を感じ、旅情気分を十分に堪能出来るはずである(写真3)。時間があれば、本島から船で周辺の島巡りをするもの良いだろう。ヴェネチアンガラスの生産地であったムラーノ島やヴェネチア最古の教会、サンタ・マリア・アスタ聖堂が残るトルッチェロ島など、その周辺も見所満載の観光地である。ちなみに、国籍別に外国人観光客の数を見てみると、第１位がアメリカ合衆国(58万人)。第２位がフランス(32万

人)。第3位以下はイギリス、ドイツ、中国、日本の順となっている。北イタリアの他の都市ではあまり見かけることのないアメリカ合衆国からの観光客が2位以下を大きく引き離れた結果となっているが、その理由は定かではない。



写真3 ヴェネチア本島の救急車(船)

(6) ヴェローナ

ヴェローナはヴェネチアの西、約100kmの所に位置するヴェネト州第2の都市で、人口はヴェネチアの26万人にほぼ匹敵する25万人に達する都市である。アディジェ川の渡河点に位置するヴェローナは、ローマ時代、数多くの街道の結節点として早くから都市として発展し、共和制ローマ支配下の紀元前49年には、ムニキビウム(自治都市)としての都市格を獲得している。ヴェローナを通過する街道の中で特に重要であったのが、アディジェ川を遡るように北へ向かうクラウディア・アウグスタ街道である。初代ローマ皇帝アウグストス帝の甥にあたるネロ・クラウディウス・ドルススによって建設されたこの街道は、レッチェン峠でアルプス山脈を越え、南ドイツのアウグスタ・ヴィンデリコルム(現アウグスブルク)を経てドナウ川流域まで伸びる街道で、ローマ帝国の北方ガリア支配にとって重要な街道であった。ヴェローナは北イタリアの都市の中でもローマ時代の遺跡が多く残る都市である。円形闘技場(アリーナ)、ローマ劇場、ボルサーリ門などの遺跡は中世の町並みと共に「ヴェローナ市街」の名称で、2000年

に世界文化遺産に登録されている。特に円形闘技場はローマのコロッセオ、ナポリの円形劇場に次ぐ規模の大きな建造物で、収容人員25,000人を誇る規模があった。現在でもその保存状態は良く、1913年から毎年この場所では世界的に有名な野外オペラ・フェスティバルが開かれている。円形闘技場は今でも「現役」の公共施設なのだ(写真4)。ヴェローナを訪れる観光客のもう一つの「お目当て」が、シェークスピアの戯曲で有名な「ロミオとジュリエット」にまつわる史跡群である。ヴェローナもミラノなどと同様に、「ロンバルディア同盟」に加盟し、一度は神聖ローマ帝国と対峙したが、その後、都市内部での教皇派と皇帝派の対立が激化する。この両派の対立の中で生じた悲哀な恋の物語が海を渡ってシェークスピアの知るところとなり、書かれた作品が「ロミオとジュリエット」である。当然ながら、シェークスピア自身は一度もヴェローナを訪れたことはないが、市内にはジュリエッタの生家(あのヴェランダもある)や墓などが残されており、観光客で賑わっている。

ヴェネチアからパドヴァを経てヴェローナに至る一帯はアルプス山脈南麓の丘陵地形が続き、オリーブやぶどうなどの樹木作物を栽培する田園風景が続く。ヴェネト州はイタリア最大のワインの産地となっており、イタリア全体の生産量のほぼ20%を占めている(イタリア統計局資料による)。生産されているワインの74%は白ワインであるが、ヴェローナ周辺は赤ワインの産地となっている。また、ヴェネト州で生産されるワインの52%がDOP(ワインの場合、その標記はDOCとその上位指定のDOCGに分かれる)対象商品となっており、州を支える重要な産業となっている。しかし、DOPの指定を受けることは必ずしも全てのぶどう農家にとってプラスに働く訳ではない。小規模生産者にとって製造規格の厳しいDOPはかえって経営負担となり、操業の継続が難しくなる場合も考えられる。生産者の高齢化にともなう後継ぎの問題も深刻だ。近年、このような状況の中で、ヴェローナから西のガルダ湖一帯のオリーブやぶどう生産農家のなかには経営の主体を農産物から観光客を対象とした民泊経営(いわゆるB&B)へと転換する動きが見られるようになってきている。近年、ヨーロッパでは、アグリツーリズム(グリーンツーリズム)

の影響により、観光客の動向が大きく変化してきている。イタリア統計局の調べによると、イタリア国内で農家などによる民泊経営体(Rural tourism properties)の登録数は約24,000件(2014年)に及び、この10年間で登録件数が10,000件以上増大した。実際に、昨年の夏にガルダ湖を訪れた時には、湖畔のホテルには空室が目立っていたが、湖を取り巻くように点在する民泊施設はどこも盛況で、満室状態に近かった。筆者もこのような民泊施設を利用したが、そこは5ha近いオリーブ畑を利用した施設で、母屋以外にいくつかの「離れ」を畑の中に増築したものだった。母屋で朝食を提供する以外にはこれといった何か特別なサービスがあるわけでもなかったが、緑に囲まれた環境は「ヒーリング効果」が抜群で、宿としての満足度は高かった。これらの施設は基本的に夕食は提供していないので、外食せざる負えないが、長期滞在者を想定して部屋には簡単な調理設備と食器が備えられており、スーパーなどで食料を調達してくれば、ゆっくりと部屋で食事をとることも出来る。宿泊者はそれぞれ、思い思いの時間を読書や散策、サイクリングといったことに費やし、過ごすことが出来、都会暮らしの人間にとって貴重な癒やしの空間になっている。ちなみに、今回利用した民泊施設の宿泊客は全てドイツもしくはオーストリアからの観光客であった(EU圏の自動車にはナンバープレートの他に国籍標識がついているので判断出来る)。考えてみれば、アディジェ川を遡り、ボルツァーノからレッツェン峠方向とは逆に右折し、ブレンナー峠を越えればそこはオーストリアのインスブルックである。さらにそこからイン川沿いの溪谷を下り、国境を越えていけばドイツのミュンヘンだ。この行程は現在、全て高速道路で結ばれており、ヴェローナからミュンヘンまでの所要時間は、ローマまでと大差がないであろう。2000年に近い歴史の中で、ゴート族やロンゴバルト族に始まり、神聖ローマ帝国、オーストリア帝国などのゲルマン系の「侵略者」が北から侵入してきた道を、今はこうやってドイツやオーストリアのごく平穏な家族が余暇を楽しむためにやってくる。このようなことを考えると、私たちの日常生活の裏に隠れている歴史的な出来事を見つめ直すことの重要性を改めて感じさせられた。



写真4 野外オペラの会場が設営されたヴェローナの円形闘技場

おわりに

一昨年、昨年の2回に渡り北イタリアを巡って一番感じたことは、日本との様々な面での類似性である。少子高齢化の問題、農村の活性化、外国人観光客の誘致など、今の日本が北イタリアから学べることは多くあると思う。勿論、それぞれが歩んできた歴史や文化の違いを抜きにして、安易に語ることは出来ない。しかし、重要なことは、こういった問題を考える場合、単に一国内の問題として扱うことが出来ないことを認識しているかどうかである。昨今、「グローバル教育」の在り方が様々な所で叫ばれるようになってきている。高等学校の地理教育に於ける「グローバル教育」とは何だろうか。それは単に、世界各地の地名や産物などの知識を「暗記」で身につけることではないだろう。グローバルな枠組みの中で問題を捉えながら、個々の地域の文化や歴史を考慮しつつ、具体的な問題解決能力を身に付けていくことなのではないだろうか。このような論理的思考方法の普遍化は、自然科学の分野同様に、人文学・社会科学の領域で、中等教育の生徒達が国を超えて同じ土俵で話し合いが出来る可能性をもたらすはずである。英語のオーラルコミュニケーション能力やICT教育の云々の前に、グローバル教育(正確には教育のグローバル化)の本質とはこのような所にあるのではないかと筆者は考えている。

参考文献

玉木利明(2014)「海洋帝国興隆史」講談社新書メチエ。

ISTAT(イタリア統計局) <http://www.istat.it/>

第12回 国際地理オリンピック (iGeo) 大会報告

井 上 明日香 (県立元石川高等学校)

はじめに

2015年8月11日から8月17日にかけて、ロシア連邦、トヴェリにて第12回国際地理オリンピック (iGeo TVER RUSSIA 2015) が開催された。参加国・地域は、過去最大の40か国・地域で、アルゼンチン、アルメニア、タイ、フィリピン、ボリビアが初参加であった。それぞれ予選を勝ち抜いた16歳から19歳の総勢159名が参加し、過去最大規模の大会であった。日本選手団も国内の選考で、4名の選手が選出され¹⁾、そこにリーダー2名が加わった。筆者はリーダーとしてこの大会に関わった。

今大会では、金・銀・銅のメダルの受賞者はそれぞれ13、27、40名であり、約半数の生徒にメダルが与えられた。日本の代表選手の結果は、3名の選手が銀メダルを獲得、1名の選手が銅メダルを獲得し、日本選手団は全員メダル獲得という快挙を成し遂げ、国別順位も5位になるなど好成績を収めた²⁾。

1. プログラムの概要

11日 (1日目)	午後 夜	受付 オープニングセレモニー
12日 (2日目)	午前 午後 夜	ライティングテスト (WRT) トルジョクに遠足 フィールドワークの講義
13日 (3日目)	日中 夜	フィールドワークテスト (FWT) 1 音楽祭
14日 (4日目)	午前 午後 夜	FWT 2 トヴェリへの遠足 ポスターセッション
15日 (5日目)	午前 午後 夜	マルチメディアクイズ (MMQ) 文化体験、お土産づくり カルチュラルセッション
16日 (6日目)	日中 夜	セリゲル湖に遠足 別れの言葉
17日 (7日目)	午前 午後 夜	モスクワ大学に移動 IGU開会式・メダリストの表彰 トヴェリに移動
18日 (8日目)		ポストエクスカースションスタート (日本は不参加)



図1 表彰式

日本代表。参加して初となる全選手メダルの快挙となった。

2. テストに関して

地理オリンピックでは3種類のテストが実施されている。ライティングテスト (WRT)、フィールドワークテスト (FW1)、マルチメディアクイズ (MMQ) であり、4・4・2の点数比となっている。例年、この形式は大きく変わらない。

WRTでは、大問が6題ある。今回は、「気候・風化」「台風・ハリケーン」「寒冷地域の環境」「水資源と治水」「スラム」「地理学と文化多様性」の大問で構成されていた。例年と同様であるが、自然地理から人文地理まで幅広くカバーする出題内容となっている。3時間の解答時間 (英語圏の国は2時間30分) で、求められる解答を端的に答える高度なスキルが必要とされる。メダルを獲得している日本選手団でも「内容は難しく、高得点を期待できない」とテスト終了後に述べていたのが印象的である。「寒冷地域の環境」の大問は開催地の地域性が反映されているものの、どのような問題が出題されるか予想することは難しい。しかし、傾向としては例年同様である。日本の地理の教科書では見られないような地図やグラフなどが多く使われており、それらを踏まえた解答をすることも必要であるため、単なる地理的思考力だけではなく、各種資料を読み取り、それらを活用する能力も必要となる。

FWTについては、二つに分けられ、FWT1では地図作成、FWT2では意思決定を行う。FWT1の出題傾向に大きな変更が見られ、例年の一つの場所の観察を行い課題に取り組むものから四つの課題に取り組むものとなり、その課題は「人口密度の計算」「断面図の作成及び露頭の岩石特定とその使い道」「公園の土地利用図」「新旧を比較した土地利用の変化」であった。全体を四つの班に分け、各国の選手が1人ずつ入った班行動の形がとられ、昼食もはさんで宿舎を出発してから戻るまで9時間ほどの非常に長い試験となった。それぞれの課題に問題に目を通す時間に5分、解答に30分与えられた。土地利用図を作成する課題は時間との戦いになったようである。一つ一つの課題はよく考えられたものとなっており、選手は「想定していた課題とは違ったものであったが、面白かった」と述べていたのが印象的である。個々の課題は難易度がとても高いというものではなく、高等学校の地理で身に付けているべき技能が見についていれば解答は難しくない。

FWT2については2時間20分の解答時間(英語圏の国は2時間)が与えられ、リソースブックレット(資料)を参考にし、解答する。具体的には都市域の計算、街づくりに関する意思決定について問うものとなっている。後者に関しては、代表選手を対象として、市街地の再開発プランを選手に提示させる研修を実施していたため、楽しく解答できたようだ。

MMQについては、図や写真のスライドを見て4択の問題に解答していく客観的試験である。45分の解答時間で、合計40問出題される。全体的な平均点は昨年と比べて高くなり、一問のミスが得点に響いたようである。時間に追われず冷静に解答することが高得点を得るために求められる。

全体的に難しいと思わせるような設問が多い中でハードな課題にも果敢に取り組むタフさが求められるのであろう。WRT、FWT2では英語圏の選手とそれ以外の選手で試験時間に差が設けられているが、これは設問・解答がともに英語で求められることによる。英語を日常的に使う選手とそうでない選手では同じ問題を読み込んだり、書いたりするのに時間の差ができるのもやむを得ないという考えである。しかし、今

大会で非英語圏の選手を対象として英語の能力や学習についての調査が行われていたことを鑑みると来年度以降には何か変更が見られる可能性もある。非英語圏の選手は紙媒体での辞書の持ち込みも認められるが、語句を調べる十分な時間はなく、試験監督をしていても、キーワードを引く程度という選手が多かった。なお、解答には端的に答えることが求められるため、必ずしも文法的な正確さが求められるものではない。

3. 数々の遠足と他国との交流

地理オリンピックでは、テスト以外の時間は遠足や文化交流などの時間に充てられている。今大会は例年以上に、様々なプログラムが用意されていた。遠足についてはトルジョク、トヴェリ、セリゲル湖の3か所に行った。いずれも単なる物見遊山にならないように準備されていたため、長いバスの乗車時間を除けば、良いものであった。

トルジョクー「悪魔の橋」と呼ばれる橋や伝統的なロシアの住居を見たのち、中世の時代に行われていた文化などを体験した。マントをまとった人に刀剣の紹介をしていただき、槍投げの体験などを行った。その後、ベルト博物館に行った。



図2 悪魔の橋(トルジョク)

石造りの橋。この周辺には、古い民家なども残されている。

トヴェリーモスクワ・サンクトペテルブルグ間を結ぶ交通の要衝として古くから栄えている。

モスクワ近郊とされるが、200km離れている。日本チームはチェコチームと一つのグループになり、問題を解きながら市の中心部を流れるヴォルガ川周辺を散策した。その過程でトヴェリの歴史的な話なども聞けて、お土産も用意されるなど相当に準備されていたようだ。



図3 ヴォルガ川が流れるトヴェリ

市の中心部をヴォルガ川が流れる。奥に見える橋は、150年以上前に建設された。川の両岸は、公園などに使われている。

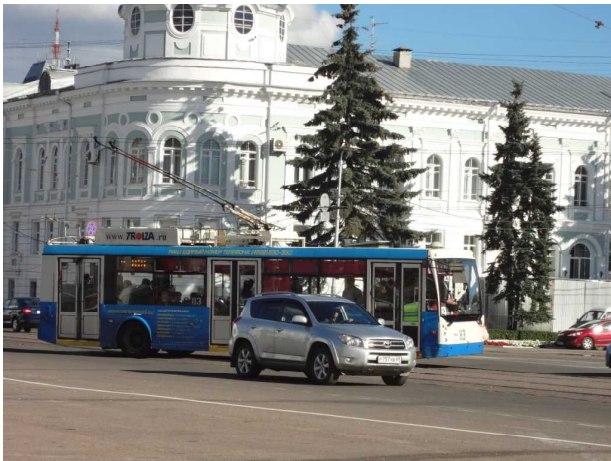


図4 トヴェリの街並み

奥に見える白い建物は新しいが、中心部で走るトラムは古くに作られたものもある。パスのキリル文字でこの写真が撮られた場所がある程度限定される。

セリゲル湖一周辺から観光客が訪ねるなどリゾート地のようなのである。セリゲル湖をボートで一周した後、正教会を訪ねた。正教徒でなくとも、ろうそくを買い、お祈りすることも可能で、お茶でもてなしを受けた。

今回訪ねた場所はいずれも地理オリンピックでなければ、なかなか訪れる機会がないと思われる場所である。地理オリンピックに合わせ、民族衣装を着た現地の人が歌や踊りなどで歓迎してくれた。加えて、様々な体験をしたことは選手にとって忘れられない思い出となったであろう。もっとも、現地の情報をもっと与えてくれればなお良かったものになったのではないかなと思う。

ポスターセッションでは「Imagine your place in the future(将来のあなたの地域)」をテーマとして、各国が事前に作成してきたポスターを披露した。どの国のポスターも非常に準備を重ね、作られていた。各国のリーダー及び選手が一票ずつ投票し、その結果で最も優れたポスターを決めるが、どれも完成度が高かった。各国のことを知る一つの契機となったであろう。日本は2020年の東京オリンピック開催で東京がどのように変わるか、というポスターを作製した。いくつかの国ではプレゼンテーションが非常に上手な印象を受けた。普段から学校教育その他でそのような機会があるからかもしれない。

カルチュラルセッションは「the greatest feature of its country(自国の優れた特徴)」というテーマで、各国が創意工夫を凝らした発表を行った。どの国も自国の文化を端的に表現し、歌や踊り、パワーポイントのスライド、演劇などの形式で紹介が行われた。日本は法被を着てソーラン節を披露した。日本の漁業文化を発信できたのではないかと考えている。

その他のプログラムでも選手間の交流が図れるよう工夫されていた。食事の時などの何気ない交流は重要で、お互いの国のことを知る好機であった。それは、地理の学習と密接に結びついており、各国の参加者は普段疑問に思っていることを他国の参加者へ投げかけていた。リーダーも同様で、様々な国の人と交流し、見聞を深めたことは今後の教育活動に資するものになると考えている。

4. まとめと今後の展望

今大会は現地情報に乏しく、トヴェリがどのような場所であるか情報が不十分なままで出発するという状態で、リーダーはともに不安な面があった。しかしながら、モスクワの近郊であ

り、サンクトペテルブルクを結ぶ要衝にあること、寒さが厳しいことなどの地域性、今後トヴェリの持つ可能性を考えるように選手に伝えた。今年は選手にあまり情報を与えられないという不安もあったが、逆に選手が得られる情報を最大限に活用して、考えることを通して、成果につながれたのではないかと考えている。

選手を最終的に絞り込んだ三次予選時から強化研修を経るに従い、選手は努力を重ねて、今回の成績を収めた。地理的事象に様々な方向から考え地理的思考力を磨き、地図作成などの技能も急激に伸ばした。今年だけではなく、今後も継続して成果をあげるようにしたいと思う。そのためには、選手自身の努力だけではなく、効果的な研修を行っていくことが求められよう。また、今年の選手は全員、まんべんなく得点したのが特徴的である。これまでは、フィールドワークが出来ないという弱点が目立ち、研修でもFWTの対策をしていれば成績が上がる部分があった。しかし、その弱点も強化研修によって克服できると考えると、今後はどの分野も苦手とせず、得点できる選手を作っていくことが、国際大会で成績を維持するために必要なのかもしれない。そのためには、強化研修の内容の精査が求められよう。同時にWRT対策は選手の努力にゆだねている部分が多いことも今後の課題と言えよう。一度、強化研修用に選手が解答した内容から望ましい解答は何か考える研修を行う以外は、専門用語のリストを配ることしか行えていない。そのため、その部分の強化を図ることが必要であろう。

また、地理オリンピックで求められる力は学校現場で身に着けるべき力となっている。複数の資料を活用しながら一つの問題に多面的にとらえていく能力は、地理以外でも必要な能力とされている。フィールドワークを行い、地域の課題を見つけるということは、まさしく現在の地理教育で求められる力であり、筆者は学校現場やその他の場面でこれらの能力を養えるよう教育活動を推進していきたい。

2016年大会は、北京にて8月17日から22日にかけて開催予定である。今後も神奈川県内の高校から代表者を出せるよう、国内予選の挑戦を歓迎したい。

最後になりましたが、地理オリンピックの予

選から国際大会まで多数の方にお世話になりました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

- 1) 選抜試験の様子は泉貴久(2015)科学地理
オリンピック日本選手権、『地理』60巻6号
で掲載。
- 2) 4名で出場する国が基本であるが、3名で
出場することも可能である。



図5 タイガ

ロシアなどに広がる広大な針葉樹林帯。場所によっては、かなり広大なものとなっている。



図6 ダーチャ

ロシアで見られる家庭菜園。野菜の生産が行われているほか、写真に見られるように花が植えられている。

新科目「地理総合」とアクティブ・ラーニング

根 元 一 幸（県立座間高等学校）

はじめに

今年度、次期学習指導要領改訂に向けての議論が、中央教育審議会に進められている。今後のスケジュールは、2015(H27)年度中に、各特別部会のとりまとめをして、2016(H28)年度中に中教審の答申、高校では2022(H34)年度から実施の予定である。

この中で、大きな話題となっているのが、地理歴史科において、地理が「地理総合(仮称)」という科目として、「歴史総合」とともに、必修化されることである。これは、日本学術会議地理教育分科会などが精力的に地理必修化に向けた活動を続けてきた成果と言えよう¹⁾。

また、次期学習指導要領改訂の方法論的な特徴の一つに、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)」²⁾があげられる。これについては、

『Guideline』2015年9月号(河合塾発行)で、「変わる高校教育」第7回として、「アクティブ・ラーニング」の特集が組まれているので参照されたい³⁾。

このような動きに対して、伊藤⁴⁾は、「地理総合」の導入で、アクティブ・ラーニングなど新科目が掲げる崇高な理念を实践できる担い手がいるのか・育てられるのかという問題提起をしている。

「地理総合」とは

現在中教審で検討が進められているが、新科目「地理総合」とは、どのような科目になるのだろうか。教育課程企画特別部会論点整理⁵⁾(p. 36)によると、「共通必修科目として…(中略)…持続可能な社会づくりに必要な地理的な見方や考え方を育む科目「地理総合(仮称)」の設置を検討することが求められる。」とある。この背景には、2007年、スイスのルツェルンにおいてIGU-CGE(International Geographical Union-Commission on Geographical Education)が行ったESD(Education for Sustainable Development)としての地理教育推進に関わる宣言(正式名「持続可能な開発のための地理教育に関するルツェル

ン宣言」)がある。この宣言では、ESDとしての地理教育の最終目標を、「持続可能な社会の構築をめざす価値観・意識の変革とそのために行動する能力を備えた人間の育成であり、ESDとしての地理教育は社会変革を指向するものである」とした⁶⁾。

図1は、2015年8月5日に示された地理科目の「検討素案」⁶⁾、図2は、12月21日に示された「地理総合(仮称)」の「たたき台案」⁷⁾である。この2つの図を比較してみよう。まず、「検討素案」では現行地理A科目から課題の項目に流れ、①選択のため履修者が少ない、②地球環境・防災教育の必要性和地理的思考力・GISスキル育成の必要性、③観察・調査・見学、体験授業の不足が指摘されている。なお、この課題は、「たたき台案」では見られない。

次に、両案ともに資質・能力の項目が来る。内容は、○地理的な技能「実践的な社会的スキルとしてのGIS活用」、○地理的知識と地理的理解「地球規模(グローバル)の自然システム、社会・経済システムの知識と理解」、○地理的な見方や考え方「空間概念を捉える力」、○態度と価値観「地域、国家的及び国際的な課題解決を模索する献身的努力」の4項目である。ただし、「検討素案」では、「新科目を通じて育成する資質・能力」という矢印が右へ伸びるが、「たたき台案」では、現行「地理A」科目から伸びる「持続可能な社会づくりに求められる地理科目」になっている。

一番右(最後)の項目は、「検討素案」では、新科目のイメージであり、「持続可能な社会づくりに必須となる地球規模の諸課題や、地域課題を解決する力を育む科目「地理総合」(仮称)」として、●地理的技能、●概念を捉える地理的な見方や考え方、●地域理解と課題解決的な学習、●持続可能な社会づくり、を柱にした概念的な書き方をしている。一方、「たたき台案」では、新必修科目(案)になっており、「地理総合」(仮称)の具体的な構成が示されている。ここから、新科目「地理総合」がどのような内容になるのかが、推測できる。全体としては、

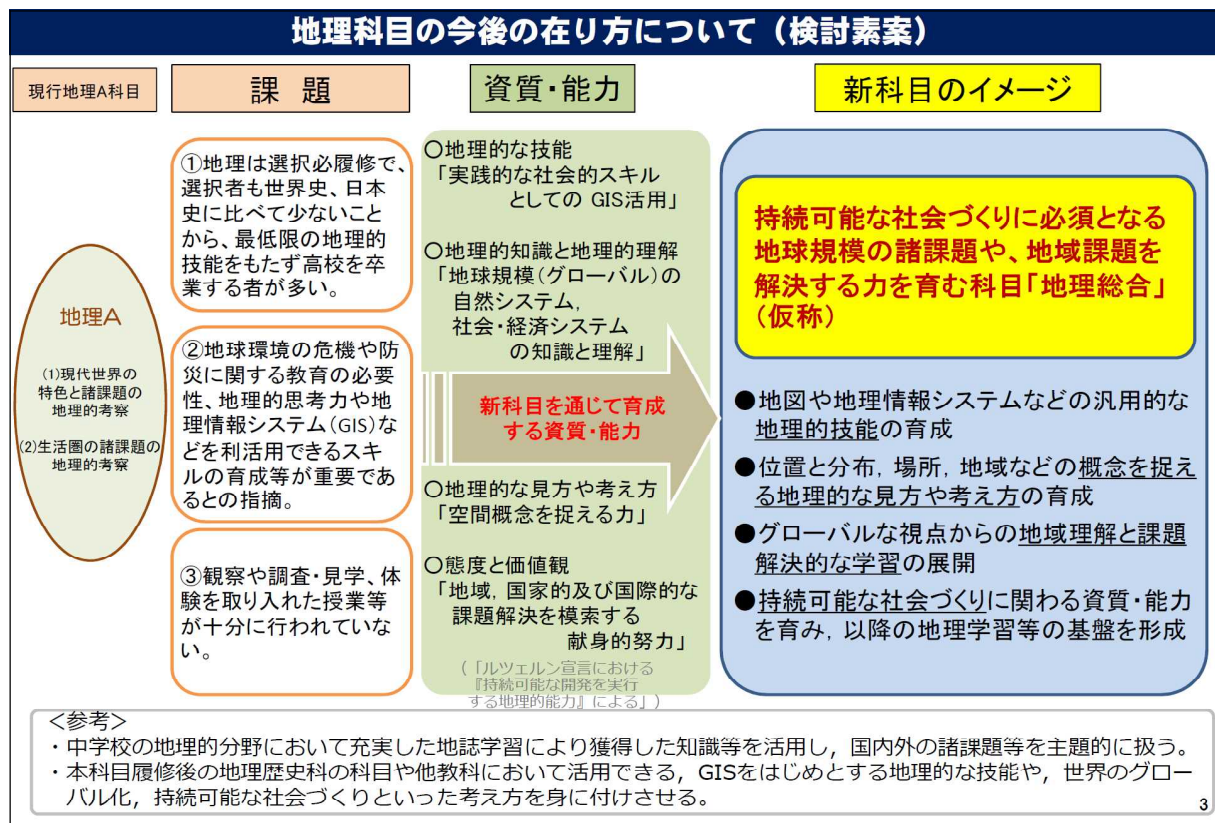


図 1 地理科目検討素案
(教育課程企画特別部会 配付資料2015年8月5日)

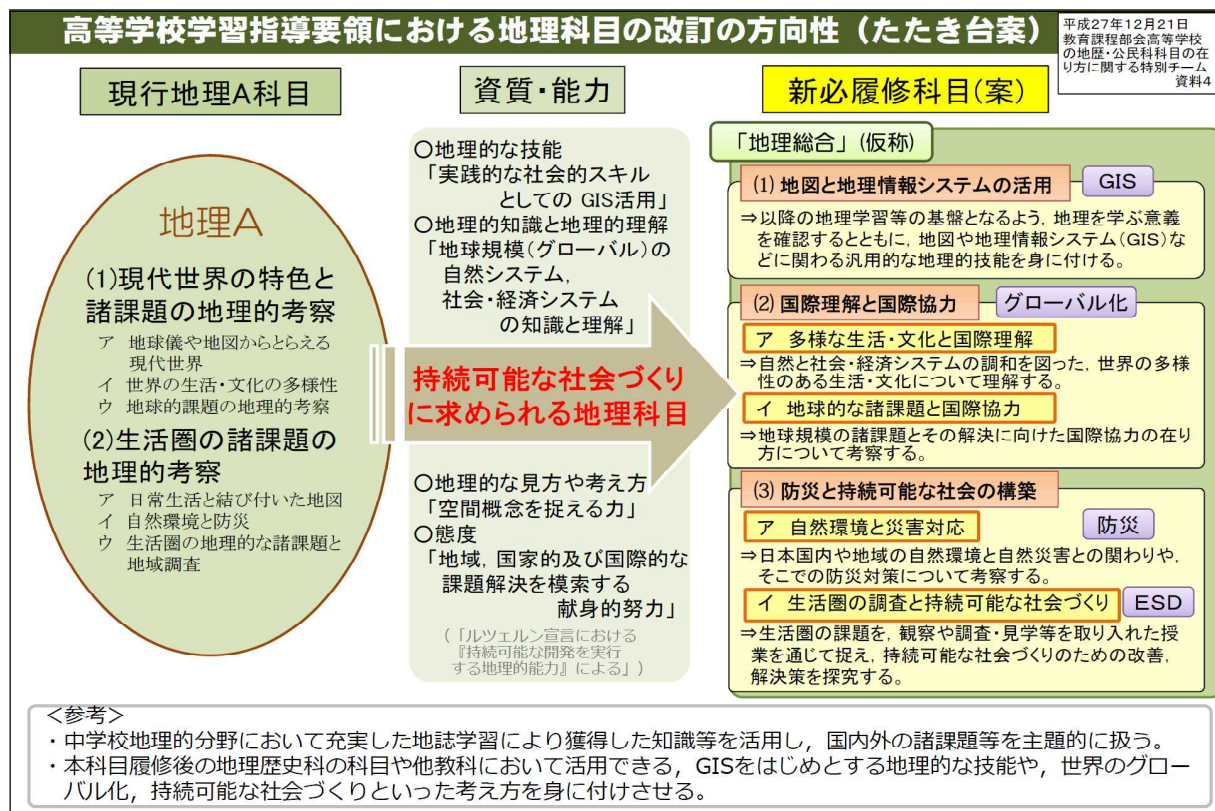


図 2 地理科目たたき台案
(教育課程部会高等学校の地歴・公民科科目の在り方に関する特別チーム 配付資料2015年12月21日)

新たな**キーワード**に沿って項目立てしつつ、現在の「地理A」の内容をどのように入れ込むかという視点が見られる。

私見を交えつつ、項目ごとに検討してみたい。

(1) 地図と地理情報システムの活用 **GIS**以降の地理学習等の基盤となるよう、地理を学ぶ意義を確認するとともに、地図や地理情報システム(GIS)などに関わる汎用的な地理的技能を身に付ける。

この項目は、現行の、「(1)現代世界の特色と諸課題の地理的考察 ア地球儀や地図からとらえる現代世界」と「(2)生活圏の諸課題の地理的考察 ア日常生活と結び付いた地図」を合わせたものになる。「たたき台案」には、「地理を学ぶ意義を確認する」とあるので、教科書の冒頭には、「なぜ地理を学ぶのか」というようなタイトルで、地理が現代社会にどのように役立っているのか、地理的な見方・考え方や地理的技能を身につけることが生活にどのように役立つのか、といった内容をはっきり示して、生徒の学習意欲を喚起することが望まれる。

この項目では、後述のGISの活用技能などアクティブ・ラーニングで授業を行う場面が想定される。

(2) 国際理解と国際協力 **グローバル化**

ア 多様な生活・文化と国際理解

自然と社会・経済システムの調和を図った、世界の多様性のある生活・文化について理解する。

現行の「(1)イ世界の生活・文化の多様性」に該当する。現行の内容では、「地理的環境や民族性と関連付けてとらえ」とあるところが、「自然と社会・経済システムの調和を図った」となっていることから、生活や文化を自然・社会・経済の調和したシステムとして捉えることが求められている。これは、20世紀後半の大量生産・大量消費の浪費文明以前の暮らしと捉えれば、持続可能な社会づくりに必要な地理的な見方や考え方としての視点で記述できる。ここでのキーワードであるグローバル化は、経済のグローバル化などネガティブな使い方をする場面が多々見られることになるだろう。

イ 地球的な諸課題と国際協力

地球規模の諸課題とその解決に向けた国際協力の在り方について考察する。

現行の「(1)ウ地球的課題の地理的考察」に該

当する。この項目は、現行の内容で既に、「持続可能な社会の実現を目指した各国の取組や国際協力が必要」となっている。この項目では、地球的課題は、従来からの国家対国家の関係からは解決が進まず、グローバルなセンスを持つ市民のネットワーク化を進め、地球市民として課題解決に向かうことの重要性が述べられるべきである。ここでは、市民のグローバル化など、グローバル化をポジティブに捉えることが必要である。

(3) 防災と持続可能な社会の構築

ア 自然環境と災害対応 **防災**

日本国内や地域の自然環境と自然災害との関わりや、そこでの防災対策について考察する。

現行の「(2)イ自然環境と防災」に該当する。現行の内容では、「…、地域性を踏まえた対応が大切であることなどについて考察させる。」とあるものが、「たたき台案」では、項目名に「災害対応」、内容に「防災対策」と、災害に対する対応・対策をはっきりと打ち出している。

この項目でも、身近な地域における災害とその対応・対策についてのアクティブ・ラーニングが展開できる。

イ 生活圏の調査と持続可能な社会づくり **ESD**

生活圏の課題を、観察や調査・見学等を取り入れた授業を通じて捉え、持続可能な社会づくりのための改善、解決策を探究する。

現行の「(2)ウ生活圏の地理的な諸課題と地域調査」に該当する。現行の内容では、「生活圏の地理的な諸課題を地域調査やその結果の地図化などによってとらえ、その解決に向けた取組などについて探究する活動を通して、日常生活と結び付いた地理的技能及び地理的な見方や考え方を身に付けさせる。」とあり、課題を地域調査や地図化でとらえ、解決の探究活動をとおして、地理的技能と地理的な見方・考え方を身につけさせることが目標になっている。

これに対し、「たたき台案」では、「地域調査と地図化」にあたる部分が、「観察や調査・見学等を取り入れた授業」となり、地理のオリジナルティーが薄まった表記をしている。また、目標も、「地理的技能と地理的な見方・考え方を身につける」から、「持続可能な社会づくりのための改善、解決策の探究」に変わっている。

これは、地理の果たす役割が、地理そのものだけでなく、広く一般化された場面で活用できることが期待されていることを現している。例えば、両案にある〈参考〉には、「本科目履修後の地理歴史科の科目や他教科において活用できる、GISをはじめとする地理的な技能や、世界のグローバル化、持続可能な社会づくりといった考え方を身に付けさせる。」とある。

これまで、この項目は、あるテーマを決めて地域調査をするという、まさにアクティブ・ラーニングを実践する場であった。これからは、このテーマを「持続可能な社会づくり」というESDの考え方に沿ったもので取り組むことになる。「持続可能な社会(Sustainable Society)」は、21世紀の地球と人類を維持するキーワードであるが、具体的には、地球環境問題や資源・エネルギー問題といったグローバルな課題の方がイメージとして捉えやすい。

当然「持続可能な社会」の考え方は、科目全体を覆うものになるはずだが、それを具体的にこの項目に明記した点は、理解に苦しむ面がある。科目の最後なので、締めの役割としたのかもしれないが。

さて、「持続可能な社会づくり」のために「生活圏の諸課題」を「観察・調査・見学」するとは、どのようなことだろう。例えば、地球的課題に対して、“Think Globally and Act Locally”という言葉がある。身近なことから行動しようということであるが、この視点を、是非この項目に取り入れたい。例えば、「地球環境問題解決のために身近なこととして何ができるのか」、「資源・エネルギー問題解決のためにエネルギーの地産地消をどう進めるか」などが、テーマとして考えられる。

講義型からアクティブ・ラーニングへ

地理に限ったことではないが、今度の改訂で強調されるのが、アクティブ・ラーニングである。これまでの授業は、「チョークとトークとジョーク」で成り立ち、テストで定着度を確認するというものであった。パソコンやプロジェクターなどの施設・設備の充実が進み、ICT教育の意識が高まって、チョークを脱した授業は増加傾向にある。しかし、教員のトークが中心の講義型形式は、相変わらずである。特に、進

学校においては、大学受験のニーズもあり、このやり方から離れるのは難しい。

「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)(前記²⁾)」を進めるには、どうしたら良いであろうか。まず、基本的な問題として、施設・設備の充実が求められる。神奈川県のある県立高校では、タブレットにもなるノートパソコンが、2015年度時点で9台配当され、無線LANで教室内のどこでもアクセスできる環境がある。しかし、これをアクティブ・ラーニングで活用している例は、あまり聞かない。

次に、アクティブ・ラーニングの具体的な取り組み方がよく分からないという課題がある。文部科学省は、「発見学習・問題解決学習・体験学習・調査学習等が含まれるが、教室内のグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」としている⁸⁾。

また、地理歴史科の課題探究的な学習として、地図や年表を読みかつ作成すること、各種の統計、年鑑、白書、画像、新聞、読み物その他の資料を収集・選択し、それらを読み取り解釈すること、観察、見学及び調査・研究したことを発表したり報告書にまとめたりすることなどをあげている⁸⁾。

具体的な例として、例えば、日本学術会議地理教育分科会では、高校地理必修化のサイトで「GISを利用した授業形態」⁹⁾を提示している。これによると、①が、教員がインターネット上のWebGISやGISソフトを使って教材を作成し提示する授業形態で、これはICT活用の講義型授業になる。このサイトでは、WebGISの例とGISデータセットの例がLinkで貼ってあるので是非活用されたい。②が、高校生がGISを操作しながら学習する授業形態で、これはアクティブ・ラーニングの一例となる。これには、次の4段階がある。

< A段階：GISスキルレベル1 >

既成の電子主題地図(ベクトル形式)や画像形式(ラスター形式)の主題図を重ね合わせて視覚的に見るだけのレベル。

< B段階：GISスキルレベル2 >

電子地図やすでに作成されている画像形式の主題図をダウンロードし、GISで簡単な主題図

などを作成するスキルレベル。

＜C段階：GISスキルレベル3＞

電子地図やすでに作成されている画像形式の主題図だけでなく、統計データなどもダウンロードし、GISで主題図を作成するスキルレベル。

＜D段階：GISスキルレベル4＞

電子地図やすでに作成されている画像形式の主題図、統計データ等をダウンロードし、GISで主題図を作成して、作成された主題図を組み合わせ、GISの空間解析機能を使用して、初歩的な空間分析ができるスキルレベル。

しかし、このD段階になると、扱う教員の方にもかなりのスキルが要求される。そこで、前述の伊藤⁹⁾のような、アクティブ・ラーニングなどを実践できる担い手がいるのか・育てられるのかという問題提起が出て来るのである。

このためには、授業に対する教員の意識改革と、上記サイトなど、ICTを活用した教員の力量向上が望まれる。授業が、100%アクティブ・ラーニングになることは有り得ない。「生徒が主体的に動けば、アクティブだ。」くらいの意識で、あまり大上段に構えずに、今から、できる環境で、できることから取り組んでみることを薦める。

また、必修化にともなって、地理専門以外の教員が「地理総合」を担当する可能性が高くなることを考えると、教員用のバックアップ教材の開発が急務である。

おわりに

今回の改訂では、全体を通して、現行の「地理A」以上に実学志向が強まる印象を持った。古典的な「地名・物産の地理」は、既に過去の物となったはずだが、現行の「地理A」教科書には、生活・文化の中に、その亡霊が見え隠れしている。教科書の内容を覚えさせ、その知識をテストで問う地理では、地理の面白さを伝えることはできない。

「地理総合」では、地理がさまざまな場面で役に立つことを実証する内容で固めるとともに、生徒が自ら学ぶ姿勢を通して「地理は楽しい！」と実感できるような構成や手法を追求する必要がある。

参考文献

- 1) 碓井照子(2015)：GISと地理教育やまぐちGISひろば http://yamaguchi-gis-hiroba./info_001.pdf
- 2) 文部科学省(2015)：教育課程企画特別部会における論点整理について(報告)2015年8月 http://www.mext.go.shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf
- 3) 河合塾(2015)：変わる高校教育7「アクティブ・ラーニング」Guideline2015年9月 http://www.keinet.ne.jp/gl/15/09/04_kawaru1509.pdf
- 4) 伊藤智章(2015)：祝(?)地理再必修化ー今、「地理屋さん」に求められること ブログ <http://itochiriback.seesaa.net/article/423788296.html>
- 5) 文部科学省(2015)：高等学校等における教科・科目の現状・課題と今後の在り方について(検討素案)(歴史教育、地理教育)2015年5月 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/_icsFiles/afieldfile/2015/06/05/1358302_02_02.pdf
- 6) 文部科学省(2015)：高等学校等における教科・科目の現状・課題と今後の在り方について(検討素案)(抜粋)2015年8月 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/_icsFiles/afieldfile/2015/08/06/1360750_2-3.pdf
- 7) 文部科学省(2015)：高等学校学習指導要領における地理科目の改訂の方向性(たたき台案)2015年12月 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/062/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/01/19/1366051_2.pdf
- 8) 文部科学省(2015)：教育課程企画特別部会 論点整理(案)補足資料(4)2015年8月 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afieldfile/2015/09/04/1361407_2_4.pdf
- 9) 日本学術会議：GISを利用した授業形態 <https://sitesgoogle.com/site/chirikyo/home/kokochiri/gis>

横須賀中心部の巡検

野 本 聡（県立津久井浜高等学校）

「横須賀市中心地の再開発」を中心テーマとして、半日程度の巡検コースを紹介する。内容としては、横須賀に多く見られる谷戸、港湾部、中心商店街をめぐり、現状を把握しその成立過程を考察するものである。コースとしてはJR横須賀駅から京急県立大学駅までである。

出発地点のJR横須賀駅は、軍港の入り口に段差なくホームから向かえる特長のある駅である。洋風のドーム状の駅舎は1940年に建てられたものである。今となっては中心市街地のはずれで、周辺で食事場所を探すのも大変な駅となっているが、そもそもは1889(明治22)年に、東海道線から横須賀軍港にできるだけ最短距離で結ぶべく大船から開通したのが横須賀線の始まりであり、かつては逆にここから市街地が広がっていたのであった。その後、第二次大戦中に、徴用した朝鮮の人々を使って長大なトンネルを掘らせ、軍の施設や港のある久里浜まで延長させたが、その際に行き止まり式のホーム片面の線路だけを先に単線で延ばしたため、途中駅にもかかわらず階段のない駅となったのである。現在は、横須賀と横浜・東京との間は、時間でも運賃でも京浜急行に及ばず、逗子以南の区間はローカル線の様相を呈している。

横須賀駅の港側にはヴェルニー公園が広がるが、その入り口には逸見波止場衛門跡の建物がある。これは明治末期に建てられたとされる旧軍港の衛兵の詰所の跡であり、いかにも軍港の町の入り口という感じを醸し出している。

横須賀駅からわずか10分ほど歩くと、汐入町



図1 横須賀駅



図2 汐入町の防災トンネル

の谷戸に着く。このあたりの谷戸は、横須賀の軍港機能が拡大した初期の市街地化で山の斜面から尾根まで家々が密集して連なる地域となった。谷戸は横須賀では特徴的な地形で、出入りに不便な谷戸の奥同士を結ぶ防災トンネルが何ヶ所も設けられている。

この辺りには、車両が入れない階段上の集落が多く存在している。谷戸の不便さのイメージとしては、奥に行けば行くほど商店や諸施設などから遠くなり、行き止まりで車も入りにくいなどがある。しかし、本当に不便なのは、どこから行っても途中で階段が存在し、家の前には車が進入できないこの尾根上の集落なのである。

今の時代の我々としては、家の前まで百段以上も階段を昇り降りする生活は至極不便だと思うのは当然であるが、このような集落が立地した頃は、そもそも人々は徒歩で暮らすのが普通であり、そう考えると職住接近したこの地域は便利な住宅地であったのである。汐入町の谷戸集落は、JR横須賀駅、京急の汐入駅、逸見駅と3つの駅から徒歩十数分の近さにもかかわらず、というか、近かったからこそきつい勾配の斜面に尾根の頂上まで集落化した。その後、建物の老朽化が進むものの建替えも難しく、若年層が流出し続け、その結果現在では市内でも最も人口減、高齢



図3 尾根への階段



図4 横須賀駅横のマンション

化、そして空家率の高い地区となってしまうている。

この地域では近年、横須賀市によって「空き家バンク」の制度が始まっている。これは空き家を利用してほしい人が市に登録し、サイトを見て住みたい人が申し込むというものである。新聞などでも紹介されたが、市の担当者によれば実際にはまだこの制度を利用して契約が成立したのは数件だそうである。入居者のターゲットとしては市内の県立保健福祉大学に地方から入学した若者で、階段の不便さを克服できれば駅近のわりに家賃は安い物件が見つかるというのが売りである。地域に若者が入ってくことで、高齢化の著しい地域の活性化にもなるというメリットもある。

なお、横須賀駅の横には尾根の先端に接するようにマンションが建っており、実はこのマンションの高層階には尾根の道の最奥部につながる避難路があるが、あくまでもマンション住民のための緊急避難路と位置づけられており、かつて市は日常生活用に尾根上の住民の利用をお願いしたそうだがダメだったということである。

ちなみに、この尾根上を結ぶ道は、海沿いに連なるトンネル群が開通するまでは、三浦半島の主要道であり、途中には東海道と港町浦賀を結んだかつての「浦賀道」の標識もある。

汐入駅から山側には、今では半ばシャッター商店街となりつつある通りが伸びているが、この道

もかつては奥の台地上にある不入斗(ちなみにこの「いりやまず」は横須賀一の難読地名)の軍施設と駅や港を結ぶメインルートであった。一方、海側には高層ホテルやダイエーが入るショッピングセンター「ショッパーズ」、そして横須賀芸術劇場などの新しい建物群がある。これらは、かつて巨大ガントリークレーンがそびえ立っていた造船所や米軍の士官クラブなど軍関係施設の跡地である。

このショッパーズの海側に、最近人気の軍港めぐりの観光船の乗船場がある。この観光船は、後述の記念艦三笠の横から東京湾一の大きさの自然島である猿島を結ぶ船会社トライアングルが運営しており、当初は休日などに臨時運航されていたものが人気上昇とともに2008年から定期便となった。

観光船は横須賀港(正式には横須賀本港)から追浜沖を通り、長浦港から横須賀港に戻ってくる。1時間ごとに出ているが、観光シーズンの休日などは乗り切れずに乗船場に並ぶこともある人気ぶりである。大きく分けると横須賀本港には米軍基地があり、長浦港には海上自衛隊施設がある。また、追浜沖では住友重機の巨大なクレーンを臨むことができる。「軍港めぐり」と呼ばれるだけのこともあり、船から見られる米軍と自衛隊の重要艦船の多さに目を見張る。

下船後は、米軍基地ゲート前を見つつ、アメリカらしさが売りの「ドブ板通り」を中心地に向か



図5 横須賀港

う。この「ドブ板」と日露戦争で活躍した記念艦三笠が、いわば旧来型の横須賀中心部の見所であろう。変わらないところが魅力なのであろうが、さすがにそれだけでは観光客は伸びないと思われる。実際、近年流行りのB級グルメでも、横須賀の目玉は「海軍カレー」と「ネイビーバーガー」となっているが、どちらも昔からの「海軍」「米軍」に依存した名物で陳腐な感はぬぐえない。夏には、ドブ板通りを中心とする中心市街地では「ドル街」というキャンペーンが行われていた。これは飲食店などでドルで支払いができるというもので、いかにもアメリカらしさを売り物にしたいのであろうが、実際どれだけの客がドルを利用したのか、キャンペーンの効果に関しては若干疑問ではある。



図6 ドブ板通り

ドブ板を抜けると横須賀の中心商業地に入る。このあたりでは少しずつではあるが市を中心に市街地の再開発が進行している。2009年に市が「横須賀中央駅周辺地区市街地総合再生計画」を発表している。これによれば、この地域の課題として「防災性の向上」「まちの魅力の創出」「住環境の改善」が挙げられている。30年以上前に建てられた建物が多くあり、郊外の量販店の伸長に伴うこの地区の小売販売額の減少から都市型住宅地区への再整備が考えられているのである。

かつて横須賀商業の中核店舗であり近年閉店した西友・さいか屋の跡が現在まさに開発中の姿を見せている。西友の跡地利用には「大滝町二丁目地区市街地再開発組合」が立ち上げられ、これを事業主体として現在再開発事業が完成しつつある。すなわち、地上38階建ての超高層建築物が市街地の真ん中に登場することとなったのである。低層階には店舗や事業所が入り上層階はマンションという複合ビルである。一方、さいか屋の跡地は巨大な駐車場として一応活用されている。市の職員の説明では、実は前述のような再開発に関する組合は西友跡地の例が最初でその後は続いていないのだそうだ。従って暫定的な土地利用の典型例となっているわけだが、40万都市の中心市街地に巨大な駐車場という光景は何か物悲しいものすら感じさせる。



図7 再開発ビル



図8 さいか屋跡の駐車場

中心市街地から国道16号線を横切り、しばらく歩くと、今度は埋立地が続く地域に出る。旧市街地から一番近いのが新港町である。ここは一番早く昭和の終わりに埋め立てられ、三角形の新港埠頭が作られたところであるが、その後のバブル崩壊でしばらくは変化のなかった地区である。今でも埠頭部分はそれほど変わり映えはないが、「よこすか海岸通り」と名づけられたバイパスの辺りには地産地消のポートマーケットや警察署、裁判所などの行政機関が移ってきている。ただ横須賀中央駅から歩くには中途半端な距離があり、ポートマーケットもそれほど観光客が多いとは感じられないのが現状である。



図9 ポートマーケット



図10 よこすか海岸通り

ここから海岸に沿って広がるのは「海辺ニュータウン」として開発が進んでいる地域である。「平成町」と名づけられたとおり、1984年から埋め立て工事に着手し、平成に入りニュータウンの事業化計画が作られた街である。海岸沿いには「うみかぜ公園」や「海辺つり公園」などもあり、海岸通の周辺には大規模量販店や高層マンションが連なっている。

この地域で特筆すべきものは神奈川県立保健福祉大学であろう。横浜市内にあった既存の県立衛

生短大と栄養短大を発展的に統合し、四年制大学として2003年にこの地に開学した。



図11 県立保健福祉大学

このように横須賀の中心部には、歩いて一日の範囲に、日本でもかなり古くから市街化が進んだ街の変わらない部分と変わりつつある部分、そして未来に向けた新しい顔などがコンパクトに集まっている。そこに見られる様々な特徴はまるで日本の縮図といっても過言ではないような気がする。

山川菊栄が見た藤沢 ー大船から藤沢を歩くー

吉 村 憲 二 (県立寒川高等学校)

I. 山川菊栄と藤沢

山川菊栄は20世紀前半に芽生えた女性解放運動を代表する人物であり、夫の山川均とともに日本の近現代史には欠かせない人物である。山川菊栄は1936年に現在の藤沢市村岡(当時は鎌倉郡村岡村)に移り住んで「わが住む村」(1943年初版)を著している。ここでは山川菊栄がみた、当時の地域の景観や人々の暮らしをかいま見ながら、大船から藤沢への道をたどっていきたい。なお文中の『 』の文は、すべて「わが住む村」からのものである。ちなみに、菊栄が住んでいた家は、現在の藤沢市弥勒寺の村岡中学校の南側あたりになる。

II. 東海道線沿線 ～水田から工場地帯へ～

『東海道の下り列車が大船の駅を出はざると、線路の両側には豊かな水田が開け、その水田の涯(はて)は低く起伏する山波に仕切られています。左手の丘陵は湘南の別荘地帯を抱いて相模湾に臨んでいます。右手の方は、点々と山裾を縫う重そうな古い藁屋根の軒から、まるで何百年この方、同じ人々が住み、同じ仕事をくり返してでもいるように、毎朝、毎夕同じ時刻に、同じような煙がたなびき、山々をつつむ朝靄、夕霧の中に、同じように静かに溶け込んで行きます。』

菊栄の文の「豊かな水田」が開けた地域には、現在は大きな工場や研究所が連なっており、「古い藁屋根」が散見される「右手の方」が菊栄が住んでいた村岡村となる。

大船駅から東海道線に沿って流れる柏尾川周囲は低湿地で水田が広がっていた。右岸は玉縄地区(鎌倉市)と村岡地区(藤沢市)で左岸は深沢地区(鎌倉市)となる。玉縄は水田の畔道に由来する地名で、深沢は湿地を示す地名である。この地域に大きな工場が進出したのは戦後になってからになる。

深沢地区の代表的企業は三菱電機と中外製薬であるが、かつての最大の工場で大規模工場の先駆けが国鉄大船工場で、1945年末に操業を開始したが2006年をもって閉鎖された。

三菱電機鎌倉製作所は「人工衛星の鎌倉製作所」として知られており、日本の宇宙開発拠点のひとつである。操業開始は1962年で、防衛システム・宇宙システム・電子システムの3本柱で数多くのエレクトロニクス製品を生産している。宇宙システムの地上設備は主に尼崎の通信機製作所が担当して、鎌倉製作所では日本最初の実用衛星の電離層観測衛星など空を飛ぶものが中心である。日本のみならず世界の人工衛星の多くに、三菱電機の機器が搭載されている。

中外製薬鎌倉研究所は日本ロシュ鎌倉研究所として1967年に開設された。2002年に両社が合併することにより、中外製薬鎌倉研究所に名称を変更した。

玉縄地区から村岡地区にかけての代表的企業は武田薬品と神戸製鋼所ということになる。

武田薬品は、藤沢市と鎌倉市の両市にまたがる地域に1963年に湘南工場を開設した。工場は2006年をもって閉鎖され、敷地に湘南研究所を建設して2011年2月に竣工した。この研究所は従来大阪とつくばの研究施設を集約するもので、国内の研究拠点となる。研究所の周辺にはマンションが多数立地し、総合病院も立地しており、当初から反対運動がみられた。大きな理由はふたつ。まずこの研究所が「P3」(Pとは「物理的封じ込め」のこと)レベルの施設で、遺伝子組み換え実験が行われるということだ。P3であれば鳥インフルエンザやSARSなどのウィルスを扱うことも可能である。もうひとつは、実験動物の焼却の問題である。住民側は動物を焼却するというのに対して、精神的ストレスを含めた諸問題を訴えてきた。この問題については2010年末に、武田薬品側は動物焼却の100%外部委託の受け入れを発表した。住民運動が企業の方針を動かしたことになる。

武田薬品湘南研究所と東海道線をへだてて隣接するのが神戸製鋼所藤沢工場で、溶接事業部門の生産拠点として1961年に開設された。

III. 村岡地区

『この村は冬暖かく、夏涼しくて凌ぎよく、

気候がよい上に地質もよくて何でも出来、川に沿い、海にも近いので魚介類にも不自由せず、山が多いので燃料は豊富ですし…（中略）…、昔から暮しよい、らかな村だったと年寄りたちはいいます。』

『村岡という地名は、重なり合う岡のむれから成立っている、この村の地勢をよく表していると思います。』

村岡地区は起伏の多い多摩丘陵の末端にあたる。現在は宅地が並び地形改変がみられるが、高度成長期以前の地形図をみると丘陵が連なっている様子がうかがえる。

武田薬品の西側にある村岡東二丁目の交差点を北に向かい、すぐに墓地手前の路地を左折すると、そこに小さな石碑があり「小塚洞碑誌」とある。交差点の西側にあたる小塚集落の耕地は玉縄地区の裏河内(武田薬品の敷地の周辺)にあったが、かつては集落と耕地との間には丘陵があった。小塚集落の農民は農機具を担いで毎日山越えをしなければならず、その苦労は大変なものだった。そこで5人の農民が協力して、集落と耕地との間にトンネルを掘ることにした。

1919(大正8)年に掘り始め、1923(大正12)年の関東大震災で工事は一時中断したが、1928(昭和3)年に開通した。現在はトンネルはなくなってしまったが、碑誌はそれを記念したものである。

碑誌から通りに戻り、ここから北に向かってしばらく坂道を上っていくと村岡城址がある。

『その城址というのは村第一の高地で、今は広い畑地で三段になっており、その中でも一番高い所は展望台のようにでも使われたものでしょうか。頂上からは大船、藤沢一帯の平地をひと目に見おろす景勝の地で、繁みに包まれた足もとの峻しい崖は自然の要害をなし、…(略)。』

IV. 柏尾川と洪水

『柏尾川が大船駅までは改修されて、それより下流は打捨ておかれたので、その地域の惨害はいっそう甚だしいものとなりました。…(中略)…。深沢、村岡二村の間を流れる部分は、昔のまま、野中の流れ水の形で勝手に路を作り、堤もないので、附近の山々谷々から流れ込む水と一所になって、大雨の度ごとに溢れては、新しい水路を作り、玉縄耕地はたちまち昔に還って漫々たる湖水となってしまうのでした。』

柏尾川は、横浜市戸塚区から栄区を通して藤沢市と鎌倉市の境界を流れて藤沢駅手前の川名で北から流れ下る境川と合流する。かつては自由蛇行がみられ、洪水も頻発して、周辺に低湿地が形成された。河内や久保田などの字地名はその名残である。1919年に堤防が完成したが、1923年の関東大震災により堤防が破壊されるなど、周辺の住民は洪水対策に苦勞をしてきた。現在では洪水は減少しているが、2004年10月には台風22号によって大船駅の北側の横浜市栄区長尾台町で柏尾川の水があふれて多くの家屋が浸水被害にあった。

V. 藤沢駅

『はじめ藤沢の駅は現在の地点でなく、それより七、八町西に当る昔の宿場附近に、また横須賀線との分岐点も、大船でなく、今私の話しているこの村、すなわち村岡村におかれる予定だったそうです。その方が距離も短く、費用も廉(やす)く万事都合がよかったのですが、住民の反対に出あい、余儀なく、この二つの駅は、人家から遠い耕地のまん中にできたのでした。そのために両駅の付近が開発地として発展し、藤沢の宿場も、村岡も周囲の発展から取残されてしまいました。』

藤沢駅は1887年に開設された駅で、JR東海道線、小田急江ノ島線、江ノ島電鉄線が乗り入れている。北口・南口とも大規模店舗があり、湘南地域でも最大の繁華街を形成している。また、市役所や簡易裁判所などの官公庁は主に駅の北側に立地している。また、北口から徒歩5分ほどのところには、ここから南にのびる江島道の道しるべがあった。

VI. 遊行寺

『いま遊行寺坂は幅の広い勾配の緩やかな坦々たる舗道で、バスやトラックが迂(すべ)るように上り下りしていますが、これは二度も山を切り開いた大工事のあとだからで、二度めはつい十余年前のことでした。舗道の両側に切立っている数十尺の山の上が昔の街道の高さで、道幅の狭い、崖のように急な、岩だらけの坂道を重い荷をもって上りおりする旅人の苦勞はなかなかのものでした。そこで雲助や人夫がいくらでもいるのでした。』

『毎月二十三日は時宗の総本山、藤沢の遊行寺の縁日で、これは村には何の娯楽もなくなった今、年寄りの唯一の楽しみで、昔から毎月お詣りを欠かさない人もあります。殊にその歳の市は盛んなもので昔は近郷近在からの人出で賑わいました。藤沢は宿場町で、この附近の経済的中心でしたし、周囲は農村でしたから、あらゆる物資が集中しますが、特に農具が主で、これは今日までその伝統を保っています。』

藤沢は宿場町でもあり門前町でもある。もともとは遊行寺の門前町として生まれて宿場町に発展した。安藤広重の東海道五拾三次の「藤澤」では遊行寺が中心に描かれているように、遊行寺は常に藤沢の象徴であった。戸塚宿から西へ向かうと、藤沢宿の手前で下り坂になる。この坂は遊行寺坂と呼ばれ、この坂を下って右側に遊行寺がある。遊行寺の正式名称は「藤澤山(とうたくさん)無量光院 清浄光寺(しょうじょうこうじ)」で、一遍上人が開いた時宗の総本山である。藤沢の地名はこの山号からとられた。

遊行寺から境川に沿って右岸を下ると、やがて道は南に向かう。この道が江島道で、健脚であれば1時間半ほどで江の島に着く。江戸時代の庶民の楽しみに大山詣があった。江戸から矢倉沢往還を通り、大山の阿夫利神社に参拝した後、現在の田村(平塚市)を経て遊行寺に詣でる。その後、江の島に向かい江の島弁財天を拝み、鎌倉、金沢八景や川崎大師を訪れるのが定番コースのひとつだったとされる。また、江の島には遊郭があり、そこで遊ぶことを目的に江の島に向かった者も多かったという。

Ⅶ. 藤沢宿

『世が変わると大名行列はなくなり、お伝馬(助郷)もなくなり、万事手軽にはなりましたが、街道の様子はすぐには変わりませんでした。相変らず、菅笠に手甲脚絆の旅人も通れば、駕籠も通り、雲助は大きな荷を担ぎ、馬子は鼻唄まじりで馬を曳いて行きました。明治五年に新橋から横浜までは汽車が通じましたが、それより先はまだ昔のままでした。もっとも汽船ができたので、大阪へは横浜から汽船を利用する人もふえましたが、東海道を旅する人は昔の通り、宿場宿場で休んだり、泊ったりして歩きました。駕籠も明治七、八年までは残っていましたが、人

力車がだんだんふえてきて、旅人はかつての馬や駕籠のように、宿場宿場で、人力を乗り継いで五十三次を東京へ向かいました。』

藤沢宿は東海道五十三次の第六宿にあたり、1601(慶長6)年に設置された。東は遊行寺のあたりから西は現在の伊勢山橋(小田急江ノ島線藤沢本町駅付近)あたりの約1kmほどの区間である。現在の市民病院から公民館にかけては「御殿」という地名があり、このあたりは江戸時代初期には徳川家の宿泊施設があり、家康・秀忠・家光が30回ほど宿泊した。その後は宿場町として整備された。1843(天保14)年の記録では、住民は4,089人、家屋数は919、本陣と脇本陣がそれぞれ1軒ずつ、旅籠が45軒あった。中心は現在の消防署のあたりで「問屋場跡」という標識がみられる。道路をはさんだ反対側を遊行寺側に少し歩いたところに「蒔田本陣跡」がみられる。

残念ながら旧藤沢宿に当たる地域では、昔ながらの町並みが残っているわけではない。ところどころに藤沢市教育委員会が設置した説明板や標識が見られるくらいである。ただ、寺院や神社が集中していることは、この地域がかつての中心で賑わっていたのを示すものだといえる。その中でも永勝寺の境内には飯盛女の墓がある。1861(万延2)年に旅籠1軒に2名の飯盛女を置くことが許された。寺の境内に何人もの飯盛女の墓があり供養されている例は珍しい。

横浜市磯子区臨海部の巡検

井 上 達 也（県立鶴嶺高等学校）

はじめに

地理分科会では、ここ数年、新たに部会に加わった新採用の方や、採用2～5年目の方々が、神奈川県について学べる機会を作ろうと、様々な試みを行っている。中でも、地理の基本である巡検は、まさに「百聞は一見にしかず」、神奈川県内を知るには最も手っ取り早い方法である。今年度は、8月の横須賀巡検(地域研究委員会)、12月の茅ヶ崎西浜周辺浜見平・柳島巡検(野外調査委員会)、今回の磯子巡検(地域研究委員会)、そして3月座間高校で実施される研究発表大会での座間高校周辺相模川河岸段丘の巡検と計画、実施している。

次の指導要領の新科目である「地理総合(仮称)」では、「観察・調査・見学」を取り入れた授業の実践が求められている。そこで、身近な地域の巡検を通じ、授業研究をし、地域を見る目を養い、授業実践へのヒントをつかんでいただけると幸いである。

1. 磯子区の海岸埋め立て

「磯子の史話」(磯子区制50周年事業委員会編、1978年)や磯子区のHPによれば、根岸湾(本牧から屏風ヶ浦にいたる海岸線)の埋め立ては、1873(明治6)年掘割川掘削の残土で、掘割川河口(現在の動物検疫所、ヤマダ電機付近)に波止場が作られたのが最初で、以後現在の国道16号線の開通に伴う埋め立てや、軍需工場建設のための杉田の地先の埋め立てなど、戦前も徐々に埋め立てが進んだ。また、桜木町と大船を結ぶ鉄道の建設(桜大線、現在の根岸線)計画もあったが、太平洋戦争の激化もあり実現には至らなかった。

戦後になり、日本の工業が急速に復興、発展すると、根岸線の開通とセットで、根岸湾の埋め立て事業が再浮上した。当時、この一帯はノリ養殖や、カレイ・アナゴ漁の好漁場であったため、事業主体の横浜市と漁民との対立も激化した。

結局、横浜市の発展という観点で、漁民も反対を取り下げ1959年から根岸から杉田にいたる埋め立てが着工された。また根岸線も1964年に

桜木町から磯子までが開通した。今回の巡検では、この埋立地に進出した日清製油(現 日清オイリオグループ株式会社)の磯子事業場の工場を見学し、その後旧横浜プリンスホテルの跡地の海岸段丘から、埋め立て地をはじめとする、根岸湾の海岸線を観察した。

2. 植物油の原料と製造工程



図1 日清オイリオ磯子事業場正門から奥に見えるのが穀物貯蔵用のサイロ

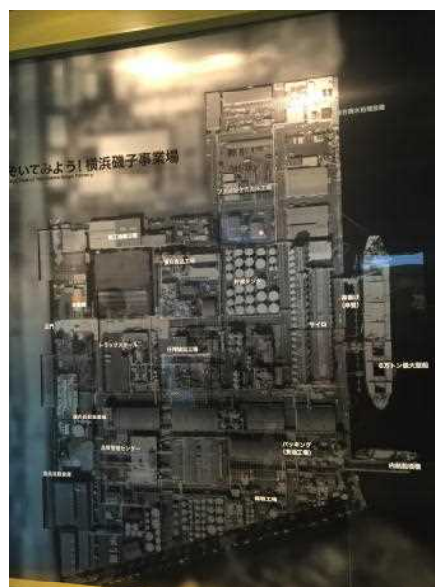


図2 磯子事業所全景
同社ギャラリーの展示より

磯子区巡検には、県内各校の教員、分科会OB

を含め19名に参加いただいた。数多くの方が参加した理由はやはり、普段はなかなか個人では入ることができない工場見学がセットされていたことだと思う。今後も、県内各所の工場をリクエストに応じ見学していくことを考えている。

集合は磯子駅の改札前、そして駅を出て、歩道橋を渡るとそこが工場の正門となる。まさに磯子駅の目と鼻の先である。

入場後説明を受け、見学者向けDVDを見てから工場見学はスタートした。新年明けてすぐということもあり、原料である菜種や大豆を砕いたりする工程は見ることはできなかったが、原料の荷揚げや製品を充てんする工程を見学できた。

磯子事業場には、専用の荷揚げ岸壁があり、7万トンクラスの貨物船まで接岸可能とのこと。この日は、5万トンクラスのバルクキャリア（バラ積船）が入港中で荷揚げ作業を行っていた。積み荷は大豆で、アメリカからパナマ運河を経由して輸送してきたとのこと。真空式の吸引装置で吸い上げ、アンローダー（ベルトコンベヤー）でサイロに貯蔵されるが、荷揚げだけでも数日かかる。またサイロの数は191もあり、11万1千トンの貯蔵能力がある。この規模は、日本最大級である。

磯子事業場では、現在搾油しているのは大豆と菜種（キャノーラ）の2種類で、大豆は主にアメリカ、ブラジルから、菜種はカナダ、オーストラリアからの輸入が多く、原料産地は収穫時期によって変えている。それ以外のパーム油やコーン油などは、生産地で搾油した原油を輸入して、この事業所で精製、瓶詰めをして出荷している。オリーブ油などは、生産地で瓶詰めし製品の形で輸入している。このように、原料となる作物によって製造場所や工程を使い分けているのは、生産費のコストを抑えると同時に、食用油の酸化を防ぎ鮮度を保つためでもある。

食用油以外の製品も、多岐にわたる。もちろん、ドレッシングや植物油に由来する化粧品の原料もあるが、大豆や菜種から副生する搾りかすで、飼料や肥料も生産されている。飼料は、小型船に積載して北海道に直送され、肥料となる油粕はトラックで関連工場に輸送される。磯子事業場では植物の種を、廃棄するようなものも含め、無駄なく活用している印象を受けた。



図3 世界の様々な油料作物の展示

日清オイリオウェルネスギャラリーにはべに花、ゴマ、亜麻仁、綿実、コブラ、ひまわり、パーム、グレープシードルなどの実物が展示されている。

3. 充填から出荷へ

工場見学の後半では、スーパーなどで見慣れた、取手つきのポリタンクへのキャノーラ油の充填の工程と、出荷の様子を見た。食用油の酸化を防ぐために窒素も封入するのだが、その技術は企業秘密であり、特許技術とのこと、それもあって工場内は撮影がすべて禁止であった。充填作業はすべて機械化され、当日は7名というわずかな人数の作業員で大量の製品が製造されていた。ボトルが流れていく随所にセンサーが置かれ、小さな異物すら見逃さないように作業を監視しているが、最後の最後は人間の目で点検している状況を見、見学者一同感銘を受けた。と同時に、食品産業の製品管理体制の厳密さにも驚いた。

出荷される製品は、商品の用途に応じペットボトル、一斗缶、そして揚げ物専門店向けにはタンクローリーで全国に向け出荷されている。

工場見学後は、同社のウェルネスギャラリー（展示施設）で食用油製造のみならず、昔の宣伝ポスター、埋め立て前の磯子の海の写真展示も

含めた磯子事業場の歴史、油を使った料理法など、興味深い展示を見ることができた。もし生徒を引率できれば、食用油に関する様々な知識を伝えることができると感じた。



図4 ブリリアシティ横浜磯子行エレベーター
スイカ、パスモなどのプリペイドカードで入場する。料金は50円。住民以外の利用も可能。

4. 横浜プリンスホテル跡地より埋め立地を臨む

磯子の台地上にあった横浜プリンスホテルは、2006年6月末日営業を終了した。1954年に西武が東伏見宮別邸を買い取り、ホテルをオープンさせて50余年でその歴史の幕を下ろした。クレージーキャッツ主演の映画「日本無責任時代」のラストシーンには、このホテルが登場し、往時の状況をうかがうことができる。映画に映る昔の風景の中には、根岸の石油タンクは見えるものの、眼下に工場の建物はなく、海岸が広がり風光明媚な土地柄であったことが確認できる。

バブル経済絶頂期、1990年に建て替えられ新たに開業した横浜プリンスホテルであるが、その後は西武グループの損失補てんのため外資に売却され、ホテルは解体された。そして、跡地に東京建物を事業者として、マンションが建設された。

マンションの建つ場所は洪積台地で海岸段丘地形を観察できる。マンションに上がる道は急傾斜で、住民の利便性を確保するため、台地をくり抜きエレベーターが建設され(図4)、住民の足となっている。

今回の巡検では、このエレベーターを使い台地上に上り、埋め立て地ならびに横浜の海岸線を観察することができた。



図5 マンション下の急崖

かつては波打ち際で、波によって削られた海食崖の様子がわかる。関東大震災のときにはこの近辺の崖が崩壊し、多くの人的被害があった。



図6 台地上から本牧方面を望む

手前のマンションの建っている場所は埋め立て地。ペリー艦隊のミシシッピ号の名に由来し、かつて根岸湾は外国人からミシシッピベイの愛称で親しまれた。

5. 洪積台地の地形

巡検の時は、洪積台地についてあまり触れることができなかった。また、資料等の準備も間に合わなかったのも、ここで簡単な説明を加える。ご存知の方も多いことは承知しているが、念のため。

横浜は坂道が多いが、その理由は洪積台地が市域の大半を占めるからである。洪積台地が形成された地質年代は、新生代第四期の更新世(約260万年前～1万年前)の時期で、間氷期(現在よりも海面が上昇した時期)に、箱根火山などの火

山灰が海底などに堆積し、やがて海面の低下、地盤隆起によって台地が形成された。今回訪れた磯子駅西側の台地は、戦後の埋め立て以前は、現在の国道16号線付近まで海が迫っており、波によって海食崖が作られ、切り立った崖の上に平坦な台地が広がっていた。

「横浜の地質調査」(地質調査所, 1982)によれば、この地域の台地は、相模層群の屏風ヶ浦層に覆われ、層の厚さは約60mとのこと。また、屏風ヶ浦層とは、磯子・戸塚から厚木、大磯丘陵にかけての内湾に堆積した火山層のことである。

終わりに

今回の巡検では、私が住む地元磯子の極々狭い地域を対象に行った。巡検を計画するにあたり、事前に磯子駅付近を歩き、また地元の区史を読むなどの準備をした。事後には地形の論文を引っ張り出して、久しぶりに「第四紀研究」、「火山灰編年学」などなどの懐かしい言葉に出会うことができた。十分とは言えないが、1回の巡検で学ぶことは多く、いい勉強になったと感じている。

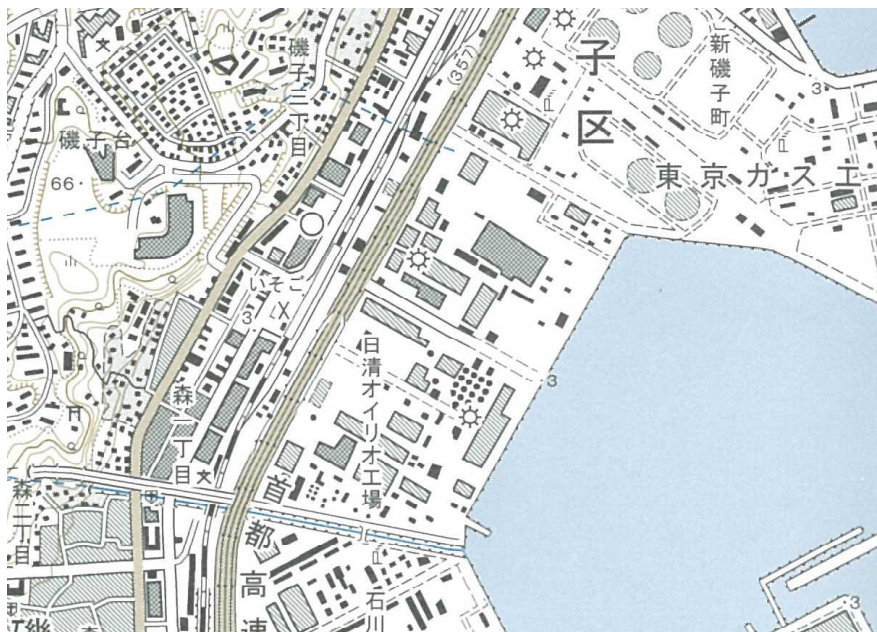
私たち地理の教員にとって、巡検は授業の基本である。また、調査地域に関しても、職場で

ある学校の周り、居住地周辺、通勤経路など、ネタはいくらでも転がっている。ちょっとでも気になったことがあれば、是非調査して、巡検を企画して、生徒を連れ出してほしい。

地理分科会では、今後もミニ巡検を企画しているので、ここはと思う地域があれば、お知らせください。同時に巡検を計画していただけるとなお幸いです。



図7 旧東伏見宮別邸
プリンスホテル時代には迎賓館として、現在はレストランとして利用されている。



国土地理院発行 1/25,000地形図「戸塚」昭和51年第2回改測・平成19年更新より一部引用(縮尺は拡大)。

地理学力テストと2015年度の問題について

伊 藤 直 樹 (栄光学園高等学校)

はじめに

県一斉テストが2012年度で終了してからも、地理分科会テスト委員会では、授業や実力テストで使用することを前提とした学力テスト問題を作成している。

今年度も特定テーマによる大問が、小問10問からなる、という構成は従来と同様である。しかし作問委員の減少という、他の委員会と同様の悩みのなかで、今回の大問6問では、全体としての「基本問題」と「発展問題」の分類はやめ、地誌的傾向の強い4問について、基本的な事項を確認することを中心とした「基本」を2問、大学入試センター試験程度の内容を含む「発展」を2問という位置づけをしている。とりあげる世界の地域については、今までと異なるところを含めて選んだ。また将来に想定されるさまざまな出題への対応として、今までの出題範囲とは異なった視点での問題もとりあげた。

問題と解答は別フォルダーに全問収められているので、そちらを参照願いたい。なお12月に各校に送付した問題の印刷物で、【4】の最後の部分に、出題とは関係のないMadridの雨温図が入っていた。これを削除し、その他解答に影響のない範囲での字句の修正を行っている(ホームページ掲載分も同様)。関係の先生方にご迷惑をおかけしたことをお詫びします。

昨年度以前の分の問題も『地理紀要』や地理分科会のホームページに掲載されているので、問題の使用にあたっては、今年度のもののみにとらわれる必要はない。たとえば昨年度以前の分と今年度分から任意の大問5題をえらび、全部で小問50問から構成される組合せを作成し、必要に応じて問題を改変していただければ、オリジナルなテストとして実施できる。ホームページ掲載分については、パスワードが必要なので、不明の場合はお問合せいただきたい。パスワードは1度入れれば複数年度分、閲覧可能である。今後も可能な範囲で毎年問題を蓄積することを目指してゆきたい。

【1】人口、都市・村落、生活文化、民族・宗教(東南アジア) [基本問題]

この大問は、人口、都市・村落、生活・文化、民族、宗教に関する問題で構成されている。東南アジアなどでは多様な文化が流入し、その生活の様子も様々である。東南アジアの問題であるが、他の地域のことも合わせて把握させたい。

問1 旧宗主国であるイギリスではないことに留意したい。

問2 解答の②について、スイスの首都はベルンにおかれ、チューリヒ、ジュネーブのほかにもバーゼルなど有名な都市が多い。その他、有名な首都の移動の例として、ナイジェリアのラゴス→アブジャなどがある。

問3 宗教別人口割合は、東南アジアの各国では大きく異なるが、旧宗主国との関連など歴史的背景を踏まえて捉えさせたい。

問4 東南アジアの食文化は多様であるが、ナツメヤシは砂漠気候のもとで作られる作物で、西アジアなどで栽培が目立つため、このような食文化は見られない。

問5 [設問1] 首都が人口最大の都市でない国がわかればすぐに解答できる。他にニュージーランドなども人口最大の都市が首都とはなっていない。[設問2] ②の文章は先進国の都市で見られる現象について述べた文である。

問6 ブミプトラ政策についてはマレー人を優遇した結果、少数の後から移り住んだ人たちが反感を持ったことなども合わせ、捉えさせたい。

問7 ベルギーはオランダ語とフランス語、ドイツ語を公用語としている。話者が多いのはオランダ語、フランス語である。

問8 人口ピラミッドの出題は選択肢の各国でその形状が異なることについて触れた上で、その変化の背景なども合わせておさえておくとういだろう。

問9 ④が示すのはポンチョであり、アンデス地域で見られる。東南アジアの気候がわかればこのような服装は通気性が悪いため適さないと判断できる。

【2】地誌 東アジア(中国) [基本問題]

中国の地誌について、自然から産業、歴史まで幅広く出題した。ほとんどの問題が教科書記載事項からの出題であるので、定期試験で出題されるには適当なレベルであると思われる。

問2 ①ナイル川、②アマゾン川、④ミシシッピ川の説明である。

問3 ①北京、②上海、④重慶の説明である。

問5 一人っ子政策もいよいよ転換を迎えるが、現在までの状況から考える。

問7 1位が中国、2位がインドという組合せの農産物がいろいろあることにも注目したい。

問9 四川料理を示している。

問10 経済特区は、改革開放政策のひとつとして、外国企業の誘致を目的とした地域で、華南を中心とした沿岸部の5都市を指定している。

【3】地誌 南アジア(インド世界) [発展問題]

地理分科会のホームページにはまだ取り上げられていない地域である。発展問題と位置づけ、2段階の思考を要する問題も含んでいる。

問2 [設問1] ①スリランカ、②パキスタン、③ミャンマー、④ネパールで、ミャンマーは昨年選挙で話題になった。

問3 [設問1] 選択肢にない、もう一つのプレートはインド・オーストラリアプレートである。[設問2] インド半島の西岸は夏季のモンスーンで降水量が増加、いっぽうA付近は砂漠気候である。

問4 [設問1] レグール土に関して、2つの問いが組み合わされている。[設問2] 作物はジュートである。

問6 YはIT産業の拠点、バンガロールの位置である。

【4】地誌 ヨーロッパ [発展問題]

ヨーロッパ地誌の問題であるが、特に第二次世界大戦後の統合過程の理解が基礎にあるものとして出題されている。

問1 戦後のヨーロッパ統合の核となる組織の確認の問いである。

問2 ヨーロッパ各国の理解が問われる問題である。①1973年加盟、酪農国ということからデンマーク。②2007年加盟、ラテン系住民の多さと少数民族ロマからルーマニア。③1986年加盟、

オリーブなどの樹木性作物からスペインまたはポルトガル。④原加盟国、国土の北部と南部で民族・言語の違いからベルギー。

問3 2004年加盟の10か国の理解を問う問題であるが、各国の位置関係を把握しておきたい。

問4 原加盟国は必須事項。

問5 EU構成国でありながらユーロ未導入の国は要チェックである。

問6 EU加盟国間の経済格差、各国の状況理解が問われる問題である。日頃からニュース・新聞などで情報を得ておきたい。

問7 ヨーロッパ南部でみられる地中海性(Cs)気候の特色、すなわち夏が高温乾燥で、冬には温暖湿潤となることを理解しているかが問われている。

問8 ヨーロッパ各国における民族や風土の違いから、各地で独特の祭りが行われていることが問われている。Ⅰはスペイン北部のナバーラ州の牛追い祭り(サンフェルミン祭ー毎年7月上旬)、Ⅱはドイツのオクトーバーフェスト、Ⅲはブルガリアのバラ祭(毎年6月上旬)の写真である。

【5】地図と地域調査

千葉県北部の手賀沼周辺、我孫子市中心部と柏市にまたがる地域をとりあげた。

問1 手賀沼沿いと20mの等高線との間にもう一本等高線があるので、それが10mの等高線になる。

問2 問1で25,000分の1だと確認できれば容易。

問3 ④「箕輪」集落が着色されているので、樹木に覆われている集落であることがわかる。

問5 [設問1] Cの天王台周辺は台地上の新興住宅地。

問7 ①柏市の人口は我孫子市の3倍以上であるが、面積は3倍以下。②柏市は約2万人の増加、我孫子市は約1,000人の増加。③人口に対する割合なので、割合は我孫子市の方が高くても、人数は柏市の方が多い。④増加人口は約1,000人なので約1%の増加にすぎない。

問8 ①の横浜市旭区と②の小金井市は台地上に位置する。また、④の千葉県中央区は都市化と宅地化がすすんでいる。③の地図の北東部に「大落古利根川」とあるので北関東であるという判

断が可能。

【6】空間把握

今までの出題範囲とは異なった視点での出題である。地理でよく用いられる距離・面積・緯度・標高・方位といった内容について、身近な空間感覚や計算結果から考えてもらいたい問題とした。

スタディオンの単位は、もともとは時間の経過から長さを決めるという発想があるが、時間と長さの関係ということがらを身につけておくと、見当のつきやすいこともある。たとえば、マラソンは2時間余りで、40km余りの距離を走り、時速は約20kmであることなど。もっと壮大なものとしては、大陸が移動した距離も時間が経つほど大きくなる。

問1 人間は2分間でどのくらい歩くのだろうか。不動産の広告で使うのは分速80mであるが、ここでは分速90mとやや速足である。

問2 神奈川県付近での実際の距離感覚があるといい。都心から横浜駅まで20数kmである。

問3 日本の面積は知っておきたい事項で、そこから計算により求めればよい。

問4 問いから北回帰線付近(地軸の傾きに相当)ということを判断させたい。

問5 日本各地の緯度もおよその見当がつくとよい。関東地方の都市(横浜や東京)の緯度や北緯40度の位置などから判断する。なお①広島は経度で約7度の差がある。

問6 エラトステネスによる地球の大きさの測定は有名な話だが、ここでは問1の解答より計算で求める方法 $180/1000(\text{km}) \times 5000 \times 7/360 \div 46,286(\text{km})$ が、知識として持っている地球1周約40,000kmと照合できるとよい。

問7 関東地方各県の最高峰の高さで、①千葉県(愛宕山)、②茨城県(八溝山)、③神奈川県(蛭ヶ岳)、④埼玉県(三宝山:甲武信ヶ岳の近く)をあらわしている。

問8 数値の知識というより、各国の面積の見当がつけられるとよい。神奈川県(2416km²)に対し、①クウェート(1.8万km²:四国とほぼ同じ)、②シンガポール(716km²:奄美大島とほぼ同じ)、③デンマーク(4.3万km²:九州より大きい)、④ルクセンブルク(2,586km²:神奈川県に近い)である。

問9 $300(\text{km}) \times 1000 \times 100/1.5$ と求めればよい。

年間1～2cm広がるという速度は、ひろがる境界で一般的にみられるものである。

問10 うっかり南東と答えてしまいがちだが、東京・アテネともに北半球にあり、それを結ぶ大圏航路を考えればよい。東京中心の正距方位図法からアテネ中心の正距方位図法が想像できるとすばらしい。地図ソフトを使って作成してみるのも一興である。

現在ホームページから閲覧・使用が可能な問題内容

2014年度

基本

- 1 地図と地域調査(世界地図と地形図)
- 2 自然環境(ユーラシア)
- 3 地誌 オセアニア・南アメリカ

発展

- 1 地図と地域調査(地形図:金沢)
- 2 自然環境(北アメリカ)
- 3 人口,都市・村落/生活文化,民族・宗教(マレーシア)
- 4 地誌 南北アメリカ

2013年度

基本

- 1 地図と地域調査(地形図:境港)
- 2 自然環境(世界および日本/総合的出題)
- 3 人口,都市・村落/生活文化,民族・宗教(ヨーロッパ)
- 4 地誌 アジア・アフリカ

発展

- 1 地図と地域調査(地形図:富士宮)
- 2 自然環境(ヨーロッパ)
- 3 人口,都市・村落/生活文化,民族・宗教(ヨーロッパ)
- 4 地誌 アジア・アフリカ
- 5 地誌 北アメリカ

港北ニュータウンミニ巡検

小 川 剛 史 (サレジオ学院中学校・高等学校)

2015年8月26日(水)、雨上がりの午後、横浜市営地下鉄ブルーライン・グリーンライン「センター北駅」に集合し、12名ほどの参加者と共に港北ニュータウンミニ巡検を行った。当日の行程は次の通りである。

横浜市営地下鉄ブルーライン・グリーンライン「センター北駅」 → 大塚・歳勝土遺跡公園 → 緑道くさぶえのみち → 横浜市営地下鉄グリーンライン地上部の歩道 → 山田富士 → 横浜市営地下鉄グリーンライン「北山田駅」

センター北駅は、横浜市営地下鉄3号線新横浜ーあざみ野間の開通にともなって1993年に開業した。今でこそ、観覧車が目を引く「モザイクモール港北」(2000年開業、都筑阪急)や「ノースポート・モール」(2007年開業)、「港北みなも」(2007年開業)、「ルララ港北」(2008年開業)、「YOSTUBAKO」(2011年開業)、「プレミアヨコハマ」(2013年開業)などにより港北ニュータウン最大のショッピングエリアとなっているが、15、6年前は、1998年開業の「ショッピングタウンあいたい」が駅ビルとしてポツンと存在するだけであった。横浜市営地下鉄は、横浜方面の隣駅センター南との900mは、「地下鉄」ではなく高架となっている。この高架橋の下は、



写真1 センター北駅前(2015年11月撮影)

「みなきたウォーク」という遊歩道で、センター北駅ーセンター南駅を結んでおり、都筑区民まつりなどのイベント会場の一つとしても利用されている。今回の巡検では足をのばさなかったが、センター北駅とセンター南駅の中心(センター)は、鶴見川水系の一級河川早渕川である。その早渕川に架かる「みなきたウォーク」の橋がその名も「センター橋」である。

「みなきたウォーク」を歩き、向かった先は大塚・歳勝土遺跡公園である。大塚・歳勝土遺跡公園は、横浜市の小学生が必ず訪れるといっても過言ではない横浜市歴史博物館に隣接した遺跡公園である。弥生時代の環濠集落跡の大塚遺跡と、大塚遺跡に住んでいた人々の方形周溝墓群の歳勝土遺跡の2つの遺跡からなる公園である。大塚遺跡では、85棟の竪穴式住居跡と10棟の高床式倉庫跡が発見されている。ニュータウンの開発により失われている部分もあるが、濠や竪穴式住居、高床式倉庫などの一部が復元されている。また、公園内には、江戸時代中期の古民家(都筑民家園)が移築されており、区民のイベントなどに利用されている。



写真2 竪穴式住居等が復元されている大塚遺跡

大塚・歳勝土遺跡公園から、蔵が残る旧家と住宅展示場のようなさまざまなタイプの住宅が建ち並ぶ新興住宅地区のコントラストを見ることが出来る牛久保東地区を抜け、緑道「くさぶえのみち」に入った。都筑区内には、全長15km

に及ぶ公園と公園を結ぶ緑道が整備されており、区民の憩いの散歩コースとなっている。都筑区ホームページでは、「都筑の美しい緑道と公園を巡る健康づくりコースマップ」と題してウォーキングマップを掲載している。

「くさぶえのみち」から歴博通りに出て、横浜国際プール方面に進むと右手に見えてくるマンション群は、「ビュープラザセンター北」(UR都市機構)である。このマンション群と日産プリンス神奈川港北ニュータウン北店の間の地下を、2008年に開業した横浜市営地下鉄グリーンラインと横浜市高速鉄道4号線が走っている。

「北山田しゃぼんだま公園」に至る路地と、その先にある「港北ニュータウン山田富士公園ハイツ」(UR都市機構)を右手に進む遊歩道は、まさに横浜市営地下鉄グリーンラインの地上部である。



写真3 この遊歩道の地下をグリーンラインが走る

グリーンライン地上部を歩き、県道荏田綱島線をくぐると、山田富士公園である。山田富士公園に隣接しているのが横浜国際プールである。山田富士公園は、その名のとおり山田富士という富士塚が残る公園である。山田富士は、平成8年に横浜市地域史跡に指定されており、横浜市教育委員会設置の説明書きによると、江戸時代の文政年間(1818～30年)には高さ30mの塚として存在していたそうだ。ちなみに、都筑区には、この山田富士の他に、池辺富士、川和富士(復元)の3つの富士塚が残っており、この周辺ではかつて富士信仰がさかんであったことがうかがえる。この山田富士を「下山」するとそこは横浜市営地下鉄グリーンライン「北山田駅」である。

横浜市営地下鉄ブルーライン・グリーンライン「センター北駅」からグリーンライン「北山田」の1駅分の港北ニュータウンを歩く約1時間30分のミニ巡検であった。1駅分ではあるが、弥生時代から平成まで、環濠集落から農村へ、そしてニュータウンへと約2000年間の土地利用の変遷がわかる巡検となった。

在日外国人社会の変遷と現状 ―在日チャイニーズを中心に―

野村 進（ノンフィクションライター・拓殖大学国際学部教授）

<講師プロフィール>

1956年、東京都出身

1981年にデビュー作の『フィリピン新人民軍従軍記』を発表。以降、アジア・太平洋地域、先端医療、メディア、事件、人物・企業論などの分野で執筆活動が続ける。

*主な著書

『コリアン世界の旅』（大宅壮一ノンフィクション賞、講談社ノンフィクション賞）

『アジア 新しい物語』（アジア太平洋賞）

『救急精神病棟』

『日本領サイパン島の一万日』

『千年、働いてきました 老舗大企業ニッポン』

『島国チャイニーズ』

『千年企業の大逆転』

『解放老人 認知症の豊かな体験世界』

1. 在日コリアンと在日チャイニーズの人口比較

外国人登録者数は、これまで1位だった韓国・朝鮮籍は、ここ24年で18万人以上も減少している。一方で、2位であった中国・台湾籍は、5倍以上に急増している。両者の逆転は2007年。以下、フィリピン人、ブラジル人、ベトナム人と続いている。中でも、ベトナム人、フィリピン人は年々増加傾向にある。韓国・朝鮮籍が減少している理由としては、在日コリアンの9割が日本人と結婚し、日本国籍を取得している現状がある。

2. 中国人留学生の実像

2014年5月1日時点で、来日している留学生18万4,155人のうち、51.3%が中国人。以下、ベトナム人、韓国人と続く。中国人留学生、日本への留学のきっかけは、日本のアニメやゲーム、ファッションである。中国人留学生の多くは、「過去は過去、現在は現在」「国は国、人は人」と考えており、ほぼ全員が親日、もしくは好日である。が、留学して反日となる場合もある。コンビニエンスストアや居酒屋でアルバイトで

きるくらい日本語が出来る留学生が、客に名札を見るなり「日本人に代わって」といわれるなどの差別を受けることもある。かつては、将来は中国に帰るという留学生が多かったが、日本に残って日本で働く留学生が多くなっている。

3. 新しい在日チャイニーズ像

日本で活躍する在日チャイニーズたち。劇団四季の劇団員にチャイニーズが多い。完全実力主義であり、北京や上海で募集をすると優秀な人が応募してくる。作家の楊逸（ヤン・イー）は、『時が滲む朝』で、外国語を母国語とする作家として芥川賞初受賞した。日本で大学教授・准教授になったチャイニーズは、約2,600人で、アメリカよりも多い。

中華学校で学ぶ子どもたち。現在4分の3は日本国籍の子どもたち。1割は両親ともに日本人という子どもが増え、様変わりしている。躰が厳しく、中国語が学べ、中国語を大学受験で使うことが出来るなどがおもな理由。

農村花嫁。山形では外国人出身の妻が2,000人を超え、その半数が中国人である。子連れで来ることも多く、統計こそはないが、6～7割がうまくいってないとの見方もある。間にブローカーが入ることにより、問題が複雑化している。ブローカーは、中国人女性に対しては、日本人の夫の親とは同居しなくてもよいなどと伝え、日本人男性に対しては、夫に尽くす人が多い、日本語が出来るなどと伝え、子連れであることは伝えない。中国人女性、日本＝都会というイメージを抱き、いざ来日してみると、自分の故郷よりも田舎で、70～80歳の夫の両親と同居。さらに、その両親からは見下されるといった現状。中国に、夫・子どもを残しているのも、1週間くらいで農村から姿を消し、東京へ行って水商売に就く。ある程度稼いだところで、入管に出頭し強制送還ということもある。

池袋チャイナタウン。池袋チャイナタウンは、横浜や神戸と違い、自然発生的に出来ていった。中国系の店舗数は200件以上、中国語新聞約10紙ある。北口の雑居ビルのポストを覗くと中国系

の店舗ばかり。中華料理店に行くと「ランチ600円食べ放題」のような店もあり、客は日本人はほとんどおらず、国内にいる中国人がレジャーとして訪れている。中国語新聞は、司法書士・弁護士の広告が多い。

4. 取材での驚き・発見

① 中国人よりも日本人を信頼している

カウンセラーは、ほぼ100%日本人を選ぶ。「中国人はウラがある」「相談事をすると、回りまわって自分に不利益が生じる」「利用される、つけ込まれる」と考えている。骨の髄まで不信社会となっている。一方で、日本の信頼社会を感じる。

② 国籍・名前への対応が在日コリアンとは全く違う

日本国籍、日本名、元号の使用に抵抗感がない。日本球界で活躍した王貞治と張本勲、金田正一、実力勝負の世界でしか生きられない、在日の生存競争の過酷さがある。

③ 日本のよさを理解して積極的に取り入れる

池袋の中国人経営の保育園、自動車教習所、どちらも女性経営者で、その根底にあるのは相互信頼と助け合いの精神。“あとから来る中国人に同じ思いをさせたくない”という気持ちがある。自動車免許取得は、移動の自由を手に入れることを意味する。中国人の友人に会いに行くことが出来るようになる。中国祖国で失われた信頼と助け合いの精神、中国文化の再発見がある。

5. 在日チャイニーズとどうつきあうか？

日中カップルの悲劇や最近の事件にみる在日外国人たちは、社会の最下層に追いやられてしまっている傾向がある。われわれ日本人が在日チャイニーズに対し、“反日”というレッテル貼りをしてしまっている危険性がある。反日であつたらこれだけ多くの中国人が日本に観光でやってくるはずはない。留学生を“知日派”に育成するところから始まる。

(文責：サレジオ学院高等学校 小川剛史)

<付記>

本稿は、2015年5月20日に地球市民かながわプラザで開催された講演会記録で、『社会科部会報』第77号から再掲したものである。

<参考>

今回の講演内容をもっと詳しく知りたい方やさらに深めたい方には、野村先生の著書『島国チャイニーズ』(講談社)をお薦めします。

第一章の「劇団四季の中国人俳優たち」、第二章「日本で大学教授になる中国人」…というように、具体的な取材先への綿密なインタビューをもとに校正されています。日本にいるチャイニーズのさまざまな思いが伝わってきて、考えさせられることの多い一冊でした。

(県立小田原高等学校 能勢博之)



編集委員（企画委員会）

岩 佐 賢 史（神大附）
岩 崎 浩 実（茅ヶ崎・定）
斉 藤 正（生田）
土 谷 優 子（光陵）
中 島 功（有馬）
根 元 一 幸（座間）
福 元 雄二郎（神大附）
古 屋 明 子（釜利谷）
村 木 憲（横浜）

2016年 3 月 7 日発行

編集発行 神奈川県高等学校教科研究会
社 会 科 部 会
地 理 分 科 会

発 行 者 井 上 達 也
〒253-0084
神奈川県茅ヶ崎市円蔵 1-16-1
TEL（代表）0467-52-6601